令和５年１月１日発行　通巻685号　毎月１回１日発行　昭和55年12月20日第３種郵便物認可

現代俳句

わたしの一句　宇多喜代子
若き日の松尾芭蕉　北村　純一
切れと感情の大陸 ―新説『笈の小文』　恩田侑布子

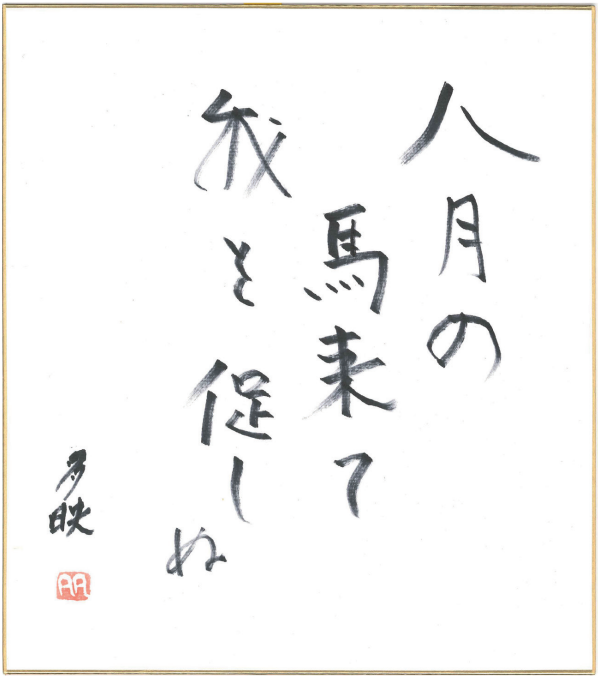
１月号

俳句ひらく

現代俳人の筆跡

昭和63年度 第35回現代俳句協会賞
平成29年度 第173回現代俳句大賞

柿本多映



八月の馬来て我を促しぬ

かきもと・たえ　昭和三年滋賀県生。五十一年「渦」入会。赤尾兜子没後「草苑」「白燕」「犀」同人を経て現在無所属。句集『夢谷』『花石』他。収録に『現代俳句集成』『現代の俳人101』など。エッセイ集『時の襞から』他。平成二十六年句集『仮生』により第五回桂信子賞、第二十九回詩歌文学館賞、第十三回俳句四季大賞など受賞。

「徐州徐州と人馬は進む」。日中戦争の最中、この「愛馬進軍歌」がよく唄われた。女学校に入学して間もなく近隣の農家への勤労奉仕が始まった。或る日、麦刈りをしていると、「うちの馬はもう帰って来ない」との呟きを耳にした。この一言はその後ずっと体の底に蔵われ、戦後六十五年を経て、不意に俳句として表出されたのだった。馬は私に何を訴えようとしたのか。齢が進むにつれ戦への諸々の思いは濃くなってゆくようだ。

わたしの一句

大旦鳥はやばやと来ておりぬ

宇多喜代子

百景共吟

川名つぎお（豈）

銀河系由来の分裂　原子炉

ハワイ空爆、復讐の原爆忌

八十代とよ抗日被災児ら

拉致は「連行」した報い雪げるか

雪月花ぞ負の遺産は絡みつき

神野　紗希

銃を抱き月下詩人も踊り子も

みなえがお愛國婦人絵双六

太陽を穴と思えり雪蛍

凍るなよ赤子に胎脂こってりと

しりとりの最後は「むげん」霜育つ

第59回現代俳句全国大会・協会各賞表彰式

（全国大会の記事は本誌 2022 年 12 月号に掲載）

日時：令和 4 年 11 月 12 日（土）
場所：JR 九州ステーションホテル小倉

▲左より川名　大氏（第 22 回現代俳句大賞）・林　桂氏（第 77 回現代俳句協会賞）
堀田季何氏（第 77 回現代俳句協会賞）・岡田一実氏（第 42 回現代俳句評論賞）
松王かをり氏（第 23 回現代俳句協会年度作品賞）

▲福本弘明氏（第 59 回現代俳句全国大会実行委員長）

右上　中村和弘現代俳句協会会長

▶平出　隆氏（記念講演講師）

現代俳句　目　次

令和５年１月号 通巻685号

グラビア 俳句ひらく
わたしの一句……宇多喜代子
百景共吟……川名つぎお　神野　紗希
令和４年度現代俳句協会　各賞表彰式
列島春秋……6
直線曲線　ＩＴ雑感……飯島　士朗　9
地区の力 地区協会報を読む(19)……中村　和弘　11
❖作品 10 句❖
象の背……中村　和弘　12
白椿……寺井　谷子　12
八頭……高野ムツオ　13
夜の雪……対馬　康子　13
音場再生……秋尾　　敏　14
新作十句……小林　貴子　14
新年……久保　純夫　15
ころなのこころ……筑紫　磐井　15
初しぐれ……永井江美子　16
百景共吟より二句鑑賞……橋本　　直　なつはづき　17
新春に寄せて……中村　和弘　18
若き日の松尾芭蕉……北村　純一　20
切れと感情の大陸　―― 新説『笈の小文』……恩田侑布子　30
俳句と私……武馬久仁裕　35
第 42 回現代俳句評論賞　佳作……後藤よしみ　37
翌檜篇(45)……東海地区青年部　編　47
ブックエリア　川名つぎお句集『焉』……前田　　弘　49
第 14 回「現代俳句の風」……50
秀句を探る……青山　酔鳴、石原　玲子　59
三軒鼻　恭、長井　　寛、中島修之輔、圓山二幸子
図書館俳句ポスト……62
◎新入会員記念作品　新刊案内……64

表紙　写真提供：「凍れる朝」横山　健二
わたしの一句　写真提供：「鳥居に居座る鳥」岡井　　剛
百景共吟　写真提供：「湖畔の雪」佐々木則子

列島春秋

1月

地区別現代俳句歳時記

◆中北海道　初景色みるみる機影未来へと　田湯　岬

◆東北海道　わかさぎ釣り三世氷上の初笑い　那珂剣坊子

◆南北海道　気嵐やご飯の上の目玉焼　佐藤日和太

◆北北海道　冬バラの散る朝透明な脳　前田　恵

◆青森　年賀状文字のこなれてゆく深夜　新谷　桜子

◆岩手　これはまた別嬪さんの破魔矢売り　名久井清流

◆秋田　父の喝褌火ガタリと崩れたる　加藤　昭子

◆宮城　餅花の揺れて田の神山の神　日下　節子

◆山形　月山を仰ぐどんとを組み上げて　大類つとむ

◆福島　をさな子の眼にも闌（たけなは）どんどの火　佐川　盟子

◆茨城　勢いをそのまま滝の凍てにけり　野口　英二

◆栃木　炊き出しの長い行列冬木の芽　佐々木輝美

◆群馬　果たさざる夢の数ほど豆を打つ　中里　麦外

◆埼玉　身に余る初夢しかも膝枕　山本鬼之介

春秋余滴

バサランダ

山形　大類つとむ

「斎灯（さいとう）」は多くの宮中祭祀の中でも、最も庶民の隅々まで伝播したひとつであろう。

私の幼い頃からのそれは「どんと」そして「バサランダ」と呼んで親しまれた。拙宅はその社の鳥居先にあるようなものなので、櫂を引きながらの藁集めや吉書焚きなど思い出が尽きない。この「バサランダ」の呼称はごくごくこの辺りの独特なもので、いつなぜそう呼んだかはどう調べても、また老宮司に伺っても解らない不

撮影　大高正史

◆千葉　我が敵は正面にあり初鏡　椎名　鳳人
◆東京都区　花びら餅に話しかけられ平和　石口りんご
◆東京多摩　折り紙に黙を折り込む冬灯　戸川　晟
◆神奈川　火カラ火へ　死ヲ生ムカラダ　交差シテ　田尻　睦子

◆富山　村の中央に盤持石がある冬日和　白井　重之
◆福井　舞扇本番は無き初稽古　惣次美都子
◆石川　椀種に金箔置かれある淑気　平林　啓子

◆長野・山梨　尖塔のひときは緊まる初山河　一志貴美子
◆新潟　隠し田も捨田も雪にかくれけり　成海　静

◆静岡　後を引く猟銃音に峰尖る　花房　なお
◆愛知　的を射る音も熱田の弓始　斎藤　保夫
◆岐阜　初夢を綴る日記の一ページ　大橋久仁子
◆三重　初伊勢や門前町に猫の声　田中　裕子

◆滋賀　またひとり賀状終いと墨の濃き　清水　瑛子
◆京都　夕映えの彼方は故郷年酒酌む　松本　鷹根
◆大阪　初明り声持つものは声を上げ　ふけとしこ
◆兵庫　迂回路もけふは込合ふ初厄神　吉田眞知子

思議である。子供たちとワイワイガヤガヤしながらも、巧みな親爺たちの技で何とか組上がった。裾からゆっくりと天辺を見上げると、さっきまで雲の中にいた月山がいつの間にか真っ白な姿を見せていた。

「バーサランダバサランダ、ずんつぁもばんつぁも皆あだれ……。」

墨つけとんど

島根　黒崎　柊二

正月の松飾りや書初めなどを焼く左義長行事を島根県出雲地方では「とんどさん」という。古くからの漁業の町である松江市美保関町片江地区では約二五〇年続く伝統の「片江の墨付けとんど」が、一月六日以降の最初の日曜日に行われる。とんど宮が担ぎ出されると、地区の女性たちは風呂場やかまどの煤を集めて水で練った墨を持ち出し、道を行く人だれかれなしに顔にぬりつける。集まった人

美保関町　観光公式サイトより

◆奈良　ひとつ欠く土偶の乳房山眠る　西谷　稔子
◆和歌山　一月の真中に太き柱立つ　池田　潤治

◆鳥取　石段を来て二ノ丸の雪だるま　石谷かずよ
◆島根　墨つけとんど女から逃げきれず　黒崎　柊二
◆岡山　確と的吉備津の宮の弓始　稲田マスミ
◆広島　校庭の真中渦巻くとんどかな　石川まゆみ
◆山口　帯ぽんと二日の女でき上る　木村たけま

◆徳島　毎日がピカソ毎日がほとけのざ　油津　雨休
◆香川　峠越ゆるわが町つつじの返り花　浜松百合子
◆愛媛　月冴ゆる銅山峰の尾根荒し　薦田のり子
◆高知　季を持たぬコロナよ神の毀れ弾　岩崎　勇

◆福岡　翁塚春はまだかと問うており　大下真理子
◆長崎・佐賀　初明り差す地球儀にあゆみ寄る　前川　弘明
◆熊本　鳥居より望む教会踏絵伝　西村　楊子
◆大分　アフガンの一隅照らす冬の月　田中　充
◆宮崎　野生馬にシリウス手綱垂らしけり　布施伊夜子
◆鹿児島　筆圧が強いね鷹の描く空　高岡　修
◆沖縄　初芝居はねても夢の中に居り　百名　温

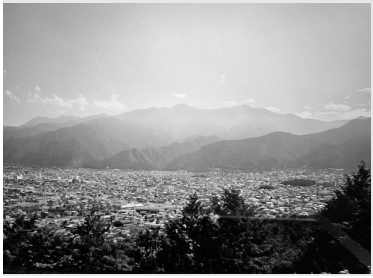
たちはたちまち墨で真っ黒になるが、顔が黒くなるほどご利益があると言われる。墨をつけられると、その一年間は風邪をひかず、海難にも遭わぬとあって、漁業の町では根深い信仰を持っている。

銅山峰

愛媛　松本　勇二

銅山峰（どうざんみね）は愛媛県新居浜市にあり、昭和四八年に閉山された日本三大銅山の一つ、別子銅山の主峰である。標高約千三百メートルとあまり高くないが、年間を通じて多くの登山者やハイカーが訪れる。そのルートには、坑道や鉱山鉄道跡など別子銅山の遺構が数多く残り、単なる登山とは少し違った体験ができる。銅山峰一帯には、高山植物ツガザクラが自生し、その群落は国の天然記念物に指定されている。

写真は新居浜市内から望む銅山峰。



撮影　松本勇二

直線曲線

IT雑感

飯島　士朗

高瀬隼子の芥川賞受賞エッセイによると、初めてワープロを使ったのは平成九年九歳のときだという。そんな頃からキーボードに親しんでいたことに驚く。

考えてみると、一九八〇年頃にはまだキーパンチャーという職業が普通に存在した。家庭にキーボードがあるとしたら八ビットパソコンのもの。もちろん漢字などは扱えない。日本語ワープロ機は数百万円した。しかしそれから十年足らずで普及型のワープロ機が手頃な価格で入手できるようになり、更に何年か後には、パソコンにワープロソフトが搭載されるようになり、キーボードが珍しくもない存在になる。

書家の石川九楊は、「訓みの音を入力して漢字に変換する」作業を「書くことへの愚弄」と呼んだ。英文入力に適したキーボードでローマ字入力を行い、それを更に漢字変換するのは、改めて考えると奇怪極まりない行為ではある。

昨今ではスマホの普及で、キーボード入力よりフリック入力(画面に表示された文字盤上で指を払うような操作)の方が多数派かもしれない。いずれにしても文字を書く機会は確実に減少している。

それでも文字を書くことにこだわりたいという人には、文字認識機能付きのスキャナーという手段も。自分が愛用するのはスマホの無料アプリで、平素は新聞や雑誌の気になる記事をスクラップしている。カメラで写真を取り、必要な箇所を指定し変換を行うだけでテキストデータが得られる。時に誤変換もあるものの、無料でこの能力ならば文句なし。先日、知人から住所を記した手書きのメモをもらった際、このアプリを使ってみたらちゃんと変換できた。なかなか賢い。しかし自分のような悪筆とは相性が悪い。

俳句を始めた頃は、吟行に際して句帳はもちろん歳時記や辞書をカバンに詰めて持って行ったものだ。今ではこれらもスマホ一つに入る時代。参加者全員がスマホを持っていれば、句会までスマホ上でできる。筆記用具なしに吟行・句会ができるようになろうとは、時代も進んだものである。

ネット上の句会は便利だ。清記者による誤記がなくなり、短冊の癖のある字を読み間違えるようなこともない。いいことずくめのようだが、参加者の個性あふれる書き文字が清記用紙に見られないというのは物足りなくもある。

紙の句帳や歳時記は、持ち歩いているうちに折れたりシミがついたりする。それが一つの思い出と結びつくこともある。デジタルだとそんな汚れや劣化とは無縁。デジタルへの傾斜は、体臭を嫌い無臭を指向する社会と通じるものがあろうか。

中原中也は飲んでいて突如自分の詩の朗読を始めたという。もっとも座の面々は一様に嫌な顔をしたそうだ。生の中也を知らない自分などは、その場に居合わせることができたらどんなに幸せかと思うが、どうもそんな生易しいものでもなさそうだ。やはり活字として読むことで、適度な距離感が生まれるのだろう。

科学技術の発達は、過去には想像もできなかったような快適さをもたらした。その一方で汚染や地球温暖化という深刻な脅威が問題になっている。普通の消費者にはきらびやかな面しか見えない。被害があらわになって初めて問題の存在に気づく。

人類の脅威と言えば、あと二十年もすればＡＩの能力が人類を凌駕するという説がある。仕事がＡＩに奪われるばかりでなく、ついには人類がＡＩに支配されるというＳＦのような未来が果たして来るのか。昨今のＡＩの実績を見るにつけ、決して夢物語ではないようにも思う。将棋や囲碁でもＡＩが人間を超え、これまでの常識を覆している。

ＡＩによって俳句や短歌を作る試みが新聞等にも取り上げられるようになった。もっともこちらの方はまだ人間を感心させるレベルには至っていないようで、意味不明の作品も多い。たとえば人間が「太陽」という言葉を使う場合、あるときは空に輝く太陽を、別のときには太陽系の中心の恒星をイメージする。しかし現状のＡＩにとっては単なる名詞として扱われるだけなのだろう。

ＡＩに一般常識を持たせることは難しい。極めて特殊な領域では人間に及びもつかない能力を見せるものの、三歳の子供でもわかる「太陽は空で輝くもの」というような知識が欠落していたりする。

何せＡＩは肉体を持たない。だから熱さや痛みがどんなものかを実感することもない。それゆえＡＩの扱う言葉はカラッポなのではという疑念も湧く。

今のＡＩ俳句は、様々な既存の俳句を学習しているようだが、仮にシーンを限定して、たとえば夏の浜辺を詠んだ俳句だけを学習させたなら、世界が小さくなり関連する言葉も減るから、もう少しわかりやすい俳句ができるのではないかとも思う。もっともＡＩのことだから、技術革新により十年後は言葉を自在に駆使し、見違えるような句を作っているかもしれない。

地区の力　地区協会報を読む（19）

中村　和弘

鎮魂の冬の花火の白きこと　　新潟県　成海　静

花火大会の花火とは違う。災害や戦争での死者を悼む「魂鎮め」の花火。地味なそれにふさわしい花火を選んでいるのだろう。冬の寒気の中、魂のように白く開く。

梅一輪一歩も引かぬ白さかな　　山口県　藤井　康文

春とは言えまだ寒気の残る中、白梅はいち早く咲く。その昔花といえば梅の花であった。今もその名残がある。白く透くような白さ。作者の意志的な把握に注目。

鮟鱇のふるえが奥歯に来て暗い　　中北海道　小川　桂

鮟鱇はやや深い海底に棲む。旬は冬、「鮟鱇の吊し切り」は独得。吊し切りにされる光景はまことに惨酷。鮟鱇を写生的に詠むのではなく主情的に鮟鱇に寄り添う。

本棚は地層のごとし五月闇　　埼玉県　小池　弥生

直喩は思いきってすべし。日本は地震大国、地震の度地層の図などテレビで放映。地層は地震の記憶を呼び覚ます。本棚までも地層に見える。身近な所に類似性有り。

死ぬという普通のはなしりんご剝く　　千葉県　山中　葛子

今日人の死もどんどん軽くなっているように思う、もはや日常茶飯事に近いか。特にコロナ禍の中。古代人の死はまつり事重大事。今日の即物的人間関係を揶揄。

はつ夏のこどもが土管を駆け抜ける　　福島県　高市　宏

野原の空地などに放置される土管か。初夏の天気の良い日、子供が土管の中を勢いよく潜り抜ける。作者の遠い記憶とも重なる。子供の動き季節感と相俟って新鮮。

作品 10 句

象の背

中村　和弘

遠足やお化南瓜に吸われたり
天老日ところ狭しと槙槍墜つ
ふくら雀七福神の中に居り
象の背のなにを啄む寒雀
蓑虫に暖冬蓑の湿りおり
高跳のバー跳ね上り小春かな
聖樹億万灯りて戦止まずなり
水底を這う魚もいて年流る
莫高窟の穴みな仏体氷りおり
爆撃の赤き火煙も年越すや

白椿

寺井　谷子

静かに臥して幸せそうよと寒の通夜
夫よ今過ぐ毎日新聞西部本社前
遺影見ておれば観られている寒さ
呼ばれしかと寄りゆく寒の遺影の前
二片は紅を帯びたる白椿
紅見せんとふくふく開く白椿
籠り居に白き椿の落つる音
夫佇つか椿落ちしか彼の音は
仏壇近く本積み上げて春寒し
燭の香の平らに流れ春の闇

八頭

高野ムツオ

万緑や永久の被曝のままなれど
夜の向日葵倒れて来るは夢ならず
血の汗とならぬは怒り足らぬゆえ
汚染水タンクの上の天の川
葡萄葛舌に絡ませ東北人
入場料無料これより真葛原
ヒメムカシヨモギと並び月を待つ
念力がありて雨呼ぶ八頭
腸を繰り出すごとし紅葉山
大冬日パンを抱けば近づき来

夜の雪

対馬　康子

タイムカード冬の水中暖かい
木の葉舞う兵の出てくる時計塔
見開けば眉間にちから冬紅葉
ひび割れた卵過去ばかりのノート
慰霊碑へ炎は凍るまで走る
草々の土の中より寒い風
竈猫ひとみの奥に陸ひろがる
外套の前髪ぱっつんユーチューブ
葱太く抜く一日の老いがあり
戦盲の夜は真鉄に変わる雪

音場再生

秋尾　敏

音源は五つ孤立の獣たち
絶滅危惧種冬晴にたどり着く
音場再生動輪は雪原に
木管の左チャンネルより吹雪
六角レンチソプラノを太く
觔斗雲いつか枯野に倒れ伏す
取材なきニュースに溢れ冬灯
歳晩の放屁はリヒャルト・シュトラウス
徴兵は自爆のボタン冬近し
冬日和わたしの影の主は影

新作十句

小林　貴子

十二月八日なかなか言葉出ず
スフマート雪来る前の岳描かむ
シテワキのいづれ幻帰り花
根の国へ人を送りて鷹渡る
寒九のバー椅子が高くて据わり悪
全員が恵方へと向くちんあなご
旅先や小さき丸き初鏡
読始窓に一木すくと立つ
初星の一つ指さし誓ひ言
伊藤野枝の忌一日歩く硬き土

新年

久保　純夫

門門は息をしており初明り
初茜猫と同じくしていたり
注連縄のうすきみどりを愛しけり
ゆるやかにきわまってゆく楪よ
裏白にさてただならぬこの気色
破魔弓の的となりゆく国家かな
大旦地べた揺がす聲あまた
現世の途中にありぬ鳥総松
松過ぎの野面積なるかたちかな
いつよりか水漬く玉体獏枕

ころなのこころ

筑紫　磐井

わたくしを断崖と呼べ　野分と呼べ
みまかれば様々なこと、　もの残る
信じたくなき真実がまま日常
たんぽぽの自在なる世はまた来まじ
たましひのえやみなるべし花は月に
はやりやまひは五味もわかたず山吹雪
新日記「どうしませう」と死神来
姉なければ姉の療養日記なし
はらはらとさくらＧＨＱよさやうなら
犯罪の匂ふ街より来し少女

初しぐれ

永井江美子

若水を汲むに鮮（あらた）な指のいろ
大空へ南無と唸りて凧
羊歯刈るやはるか大和の草の庵
乾坤はしづかなりけり榠樝落つ
風花やうすくらがりをうるほせり
雪しまく花折峠燃ゆるかに
初しぐれいつしか音となりにけり
花奪の花あざやかに美濃は雪
密の人ひとり消えたり寒卵
梅匂ふここに人恋ふをとこかな

2023年度 **口語詩句賞**
新人賞100万円　優秀賞50万円　奨励賞10万円

2023年度 **口語詩句奨学生**
給付型奨学金
年額 大学生・大学院生50万円 高校生10万円 中学生5万円

後援 現代俳句協会 思潮社

口語詩句作品要領 ● ◎詩性を表現しようとした作品　◎口語作品　◎作品1点につき、6文字以上、35文字以内　◎漢字1文字を1文字（読みがな文字数ではない）　◎5行以内とし、1行15文字以内　◎句読点、分かち書き、行を空けることを可とする（空白行は1行）◎なんらかの賞を受賞された作品もしくは全国商業誌に掲載された作品は対象外です

応募方法 ● 当財団運営口語詩句投稿サイト72h（https://www.kougoshiku-toukou.com/）への定期投稿ほか、応募要領を確認下さい

公益財団法人　佐々木泰樹育英会

〒104-6591　東京都中央区明石町8番1号　聖路加タワー40階

https://sasakitaijuikueikai.or.jp/　お問合せ jimukyoku@sasakitaijuikueikai.or.jp

百景共吟 より二句鑑賞

橋本　直

残心の血の海紅葉生きてうごく　　植田　密

（二〇二二年十月号）

「残心」を心残りと解釈すると、なにやら血にまみれた酷く深い後悔の海のなかにいる人物が現れてくるのだが、これが武道で言う残心なら、なにやら剣豪の決闘の後のような凄味のある景色が立ち現れてくるようでもある。「生きてうごく」のだから実際は紅葉が風に揺れ、その色に染まった空間の、凄まじいまでの赤を言う喩ということなのだろう。

葺き替へし檜皮の色や秋日濃し　　古梅　敏彦

（二〇二二年十月号）

この句の二つ後に「水澄んで兼六園の魚の数」があるので、これも兼六園あたりの風景だろうか。葺き替えられたばかりの檜皮は、まだなまなましい木肌の風合いがあって、下の建物が古いと、その色の枯れ具合との落差が奇妙な感覚をおこす。この句は、まさにそのような檜皮に、秋の日が差すことで一層の色の際立ちがある様をとらえているのだろう。

なつはづき

山ひとつ違へてをりぬ神の留守　　谷口　慎也

（二〇二二年十一月号）

山ひとつ違へる、とはどういう事だろう。登ろうとした山を間違えてひとつ隣の山に行ってしまったのか。いや、ただの山登りではない。山は山岳信仰の対象、神のおわす所だ。神なくば神の場所にさえたどり着けないのか。皮肉とユーモアが入り混じる掲句は、「現代の神」とは何か問いかけている。今の世の中、実は神さえも迷っているのではないだろうか。

カムイ棲む山より颪冬支度　　石川　青狼

（二〇二二年十一月号）

カムイはアイヌ語で神。アイヌではカムイは鳥や獣に姿を変え人里にやってくるという。山から颪と共にやってきたカムイはこれから長く閉ざされる北の大地の民のためにその身を捧げるのだ。人々はその身を賜り、魂を送り返すために儀式を行う。動物はもちろん、火も風も水もすべてに神がいる。わたしたちは生かされている。ふとそんなことに気づく。

新春に寄せて　心にひびく

中村　和弘

コロナ感染拡大が始まってから足掛け三年になる。コロナ社会と言われるように、その影響は社会全域におよび計り知れないものがある。パンデミック、ソーシャルディスタンス、ステイホームなど、聞きなれないカタカナ語がメディアに溢れるようになった。そもそもコロナという言葉も新しく馴染みのない言葉である。

ソーシャルディスタンス、ステイホームなどコロナ禍以前の社会と全く逆行している。ましてや俳人にとっては困ったことになった。俳句は一般的に「密」、つまり人間関係を尊ぶ文芸である。句会、吟行、俳句大会などはその最たるものである。社会的要請により、この二年半おそらく総ての大会、句会などが中止のやむなきに到り、今も続いている。災害などで一時中止することはあったものの長期間続くことは過去に例がなかったことであろう。

現代俳句協会も例に洩れず、俳句大会、理事会、総会等も中止、文書のみとした。幹事会もパンデミックが始まってからオンラインに切り替え活動に支障がないように続けている。

コロナ禍中俳壇全体をとおして活発であったのは俳句の研究書であろうか。その中で注目したのは著名俳人の百句鑑賞である。寄贈していただいたものだけでも四冊。

①『三橋鷹女の一〇〇句を読む』（川名大著　飯塚書店刊）
②『永田耕衣の百句』（仁平勝著　ふらんす堂刊）
③『鈴木しづ子一〇〇句』（武馬久仁裕・松永みよこ著　黎明書房刊）
④『芭蕉百句』（五島高資著　風詠社刊）

過去、作家の百句鑑賞は数限りなくあろうがこの四冊、百句採りあげている視点がくっきりとしており力作である。そもそもなんで百句なのか。百句あればその作家の代表句がほぼ収められる、この句数であれば一般的に読まれる、等の理由があろう。この四冊はそれを越す深さ・趣がある。私が力作と言ったのはさらに著者の個性である。

①　著者川名大は、新興俳句を現代俳句史の中で正当に位置づけ各々の作家論は定評のあるところである。すでに『渡邊白泉の一〇〇句を読む』があり好評であった。『三橋鷹女の一〇〇句を読む』はそれに続く著作である。その帯文は「ジェンダーバイアスを解き放った情念の世界」とこの著書の意図を暗示している。ジェンダーバイアスとは「男らしさ」「女らしさ」など男女の役割に関する固定観念やそれに基づく差別・偏見・行動などを言う言

葉である。その趣の句〈鞦韆は漕ぐべし愛は奪ふべし〉〈夏痩せて嫌ひなものは嫌ひなり〉などはよく知られていよう。

日本の男の子かなしも業平忌
夏深く我れは火星を恋ふをんな
夏野原征くべき吾子を日に放ち

などはそれほどに世に喧伝された作品ではない。それを収めたところに著者の意図を感じさせてくれる。

あとがきに、鷹女の俳人としての生き方を味読してくだされば とある。まさにこの百句、鷹女の人生であり、川名大の三橋鷹女論ともなっている。

② 永田耕衣の作品は私も大好きである。禅については全くの素人であるが耕衣の作品に強く魅かれる。永田耕衣の評論、俳句論はなかなか難解である。それは、禅を前提にしていることにもよろうが、私は耕衣作品自体をそれほど難解と思ったことはない。そのことを仁平勝は「耕衣の句が読む者を魅了するのは、五七五の言葉がときにその意図を超えて飛躍するからだ」とわかりやすく述べている。

春の鳥双眼鏡に一つかな
行く水の平らかに桃流れ来ず
水を釣つて帰る寒鮒釣一人

などはあまり耕衣の代表句として抽出されることはなかったように思う。えてして耕衣作品そのものより永田耕衣作品論・作家論の方が難解になりやすいが、この百句解釈はわかりやすい。

③ 鈴木しづ子の作品は、時として話題になりよく読まれたりする。その側面にエロティシズムがあろう。『鈴木しづ子の一〇〇句』は武馬久仁裕と松永みよこの共著である。この著書の「はじめに」に「スキャンダラスな衣装をまとわされてきた彼女の俳句から、その衣装を取り去り自由に読もうとするものです」とある。どの文芸もそうであるが読者の方が固定概念に陥りやすい。この著書はそれを正している。

炎天の駅みえてゐる草の丈
炎暑の地罐がころがる誰も除かず
春風の中山道に出ては買ふ

などはあまり採りあげられることのない作品であろう。人間一人の人生は単純ではない。

④ 『芭蕉百句』（五島高資著）は、前三冊とは異なり芭蕉百句を英訳、そして鑑賞（日本語）した労作である。外国語が不得手な私はこの英訳が秀れたものか正確にはわからないものの心に韻いてくるものがある。例えば

旅人と我名よばれん初しぐれ
The fist rain of winter
I'd like to be called a traveler
instead of my name

など英語で読む、読み上げてみるのも楽しい。

コロナ禍の中まんざら悪いことばかりではない。自粛、ステイホームにて佳き著書に恵まれ、読むことのできることこその至福である。

若き日の松尾芭蕉

『伊賀の人・松尾芭蕉』（文春新書）出版の経緯とねらい

北村　純一

はじめに

本書出版のきっかけは、平成三十年に出版した小説集『芭蕉と其角―四人の革命児たち』（芭蕉・其角の小説とモーツァルト・ベートーヴェンの小説を収載）に遡ります。この芭蕉・其角の小説は伊勢新聞に百二十回連載したものですが、その執筆に際し芭蕉関係の各種文献に当たる必要に迫られました。そして、その折々に印象に残ったものや感銘を受けたエピソードなどを書き留めるうち、小説とはまた違った形でまとめたいという思いが強くなりました。幸いにもこれが「芭蕉の横顔」というタイトルのエッセーとして朝日新聞伊賀版に六十回連載され、そして、今回文藝春秋より、これをベースに、文春新書として出版の話を頂きました。ただこれには、新書へのハードルがありました。一つは新聞連載のテーマがアットランダムだったので、芭蕉が江戸へ出る前と後、旅の芭蕉、門人たち等の大きな括りで、この順番を組み替えること。あと一つは新書のボリュームにするため、大幅に加筆すること。この編集者との二人三脚の作業は大変でしたが、それでも、徐々に一冊の本に仕上がってゆくのは心地よいものでした。この出版は、文藝春秋の企画・編集・校閲・営業・宣伝など多くの方々のご尽力の賜であり、感謝に堪えません。そして小生を含め伊賀出身者は、従来芭蕉というと江戸深川の芭蕉庵から旅をしたというイメージが強く、生地伊賀の影が薄いことに歯がゆい思いを抱いてまいりました。「芭蕉は江戸ではなく伊賀の人として俳諧人生を全うした」、という趣旨を踏まえたタイトルでのこの度の出版は、かかる意味で大きな喜びでした。

述べ尽されてきたともいえる芭蕉像ですが、出版のねらいは、神様ではない人間芭蕉を描くことで俳聖芭蕉誕生の秘密に迫ることにありました。そして七十以上のテーマで芭蕉の多彩な魅力をわかりやすく表現することに腐心致しました。さらに芭蕉像の輪郭の鮮明化と舞台の彩色に、芭

蕉の一番弟子其角と、同時代人西鶴を配置しました。小生の出版は従来俳句や小説という創作が主体でしたが、今回は評論・エッセイの試みです。手前みそになりますが、芭蕉専門家とは一風変わった作家としての視点・視野と、俳句実作者としての経験が与かってなったものと思っています。

本稿では芭蕉が生地伊賀から江戸に出るまでを、新書とは違った切り口で辿ってみたい。

一　抱きすくめられた芭蕉

「宗房や。わたしは、こうしておまえと二人で俳諧の話をしているときが一番幸せなのだ」

「わたくしも同じでございます。若様のおそばにお仕えする、これ以上の幸せはございません」

若様は、嫡子として藤堂新七郎家を継がねばならぬという足枷（あしかせ）さえなければ、一生の生業にしたいというほどの俳諧好き。そして、師と仰ぐ北村季吟先生も認める、豊かな才能に恵まれていた。一方宗房（のちの松尾芭蕉）は、俳諧の才能を認められ、若様のおそば近くに仕える小姓として引き立てられた俊英。若様はその際立った才能を持つ宗房をいつくしんだ。

「宗房や。死を恐れなくなる場所とは、いかなるところであろうの」

「満開の桜の下と西行師は詠まれましたが、人が踏み入れない程奥まったところにある湖にも惹かれます」

「遠慮はいらぬ。もっと近うよれ、宗房」

「はい」

勉学にいそしむ旨告げてあるので、誰も入ってくる気遣いはなかった。若様は宗房の穢れのない美しい手をとり、その手の甲にそっと口づけした。そして宗房の身体を強く抱きしめた。突然抱きすくめられため、戸惑い、一瞬身を固くした宗房だったが、その心地良さに、いまは放心したかのように見える。触れる着物がひんやりと感じられる季節だったが、そうは思えないほど上気していた。

「もっと強く抱きしめてくださいませ、若様。もうこのまま息絶えても本望というほど幸せでございます」

宗房は若様に気を使ってそう述べたのではない。心底うれしかったのである。いつも一緒にいたいほど慕っていたのだ。言葉をかえれば、愛していたのだった。

「こうして二人、息が絶えるまで一緒におりたいものだ。わしは俳諧とおまえがあれば、他に望むものとて何もない」

「一生離れたくありません」

若様は元服間もない十六歳、宗房は二歳下の十四歳。二人とも男盛りというには間があり、あどけなさが残る美少年だった。いや、二人そろって華奢な身体つきであり、かつ色白でおとなしい目鼻立ち。美少年というより、美少女

と言ってもいいほど艶やかだった。しかし、ただ美形だったというだけではない。今の私たちには十五歳前後と言えばまだまだ子供のイメージだが、当時は自分の人生設計が十分できる立派な成人だった。だから、この二人も子供のじゃれ合いでは決してない。大人の相愛だったのである。

この時から二人は、主従関係を超えた学友となり、さらに読書にも一つの灯火を分かち合う親しさで接するように変わった。

「今日は季吟先生が、京都からわざわざお見えになるが、こんな機会はそうそうない。父上には許しを得ずともよかろう。わたしが特別に許す。私の後ろで先生の講義を一緒に聞くがよい。遠慮はいらぬ」

「ありがたき幸せでございます。こんなにうれしいことはございません」

宗房の満面の笑みをみて、若様も満足の様子だ。何より学問・芸術好きの宗房。天にも昇る心地がしたのは言うまでもない。

冒頭にこのような唐突な文章で恐縮ですが、これは宗房と名乗っていた若き日の松尾芭蕉を描いた筆者の創作です。筆者はこれに近いものが実際にあったと信じて疑いません。

さて、宗房(以下芭蕉)を抱きしめたのは、芭蕉が当時小姓としてお側近くに仕えていた若様である。藤堂藩は、今の三重県の県庁所在地である津に本城があり、分城が伊賀にあった。その伊賀付き侍大将藤堂新七郎家(五千石)の若様である。伊賀付き侍大将は他に、藤堂采女家(城代　七千石)と藤堂玄蕃家(五千石)があった。

男色は、江戸時代に衆道と呼ばれた男子の同性愛だが、当時は何らいかがわしいものではなかった。僧侶や武家だけではなく、町人にも容認されていた風俗である。あの辣腕井原西鶴も、男色を文学の素材にしている。年上の愛する側の男性を兄分または念者(ねんじゃ)、そして愛される側の年下を稚児または若衆(わかしゅ)と呼んだ。

それはしばらく置くとして、このような形で抱きしめられるのは、芭蕉にとって、母親に存分に抱きしめられて育って以来、初めてのことだったろう。芭蕉のこの若い頃の〈抱擁体験〉。これは芭蕉が一生涯求め続けた「俳諧のありよう」を決定する体験だった。それは、芭蕉の俳諧に接した読み手の誰もが感じる、「抱擁された時に感じる幸福感」だ。人々を俳諧で幸せにしたいという芭蕉の願望は、この体験があって初めて育まれたものだったに違いない。

二　芭蕉の出自

藤堂藩に無足人制度というのがあり、芭蕉はその生まれ

だ。無足人とは、人足としての徴用を免除された下級武士、郷士のこと。この制度は、藤堂藩統治以前からの土豪の懐柔策として作られたものである。また、無足人を大庄屋や庄屋に任命し、領内の末端の統治を担わせていたケースもある。芭蕉の父は生涯仕官が叶わず、兄半左衛門も初めは浪人だったが、のち陪臣ながら藤堂玄蕃家に仕官が叶っている。

物領ではない部屋住みの芭蕉は、武家奉公人になったが、小姓に抜擢され、若様のお側近くに仕えることができた。この抜擢は、文武両道を重んじる藤堂藩にあっても、新七郎家が特に学問・芸術を重んじる家風で、当主良清が和漢の学に造詣が深く詩歌にも堪能だったことが背景にある。そして、芭蕉の傑出した学才が城下に響いていたであろうし、また松尾家のルーツが柘植（現伊賀市）の城主という、その家格も与かってのことだったのだろう。伊賀に寺子屋制度が成立していたか疑わしい時代に、無類の俳諧好きだった若様の学友として、京の北村季吟（以下季吟）の薫陶を得られたことは幸運というほかない。

さらに付け加えれば、織田信長が天正伊賀の乱で伊賀の地侍を殲滅掃討したのだが、信長に反抗し奮戦した伊賀侍の中に、芭蕉の松尾家も入っている。芭蕉のその敗残者の血は、木曾義仲・源義経や明智光秀などの敗者への温かい眼差しと無関係ではないと思われる。

三　藤堂高虎

三十二万石の大藩だった藤堂藩は、外様大名だが、藩主藤堂高虎が家康の側近だったため、「別格譜代」の格付だった。高虎は、その出世に徳川譜代から妬みを買ったこともあり、主君を次々と替え信長・秀吉・家康の三代に仕えた世渡り上手、と揶揄された。さらに幕末の鳥羽伏見の戦いで、藤堂藩が新政府軍側に寝返ったことで、藩祖高虎の悪評に追い打ちをかける。しかし実際は、真反対。「大坂夏の陣」の先鋒はじめ数々の戦功を積み重ねた、正真正銘の武将だった。世渡り上手という揶揄は、義を重んじた努力家あるいは苦労人とでも言い換えるべきだろう。残した家訓は「高山公御遺訓」と呼ばれ、苦労人ゆえの含蓄に富むものだ。また温情豊かな人格者で、かつ茶の湯や能楽を好む文化人でもあった。座右の銘は、「寝屋を出るよりその日を死番と心得るべし。かように覚悟極まるゆえに物に動ずることなし。これ本意となすべし（今日が死ぬ日かもしれないという覚悟を持って日々生きるべきだ、この覚悟があれば何物にも動じることはない、という意）」だった。

高虎は身長六尺二寸（約一九〇センチメートル）を誇る、当時稀な大男だったようだ。そして、その身体は如実にその戦歴を物語る。指の一部の欠損など、弾傷や槍傷で隙間なかった。ちなみに七五歳で高虎が死去した際、遺骸を清めた若い近習（森石見）が、満身創痍という形容そのものの

姿に驚いたと言われている。

家康の信頼が厚く、侍従として臨終にも立会う。「家康茶会」のメンバーで、のち自分の茶会に二代将軍秀忠を招待した程だ。また江戸城など築城の名手として名高い。関ケ原の戦いの際、敗戦時の退却を想定し、伊賀上野城を堅固にした。その石垣の高さは三十メートルあり、大阪城に次ぐ。芭蕉の仕えた若様の祖父藤堂新七郎家初代の良勝は、高虎の従弟にあたり、新七郎家と藤堂本家は特に近しい血脈だった。その良勝に高虎は全幅の信頼を寄せ、良勝は高虎の戦いのほぼすべてに従軍したが、惜しくも大坂夏の陣で命を落としている。

四　芭蕉の先生・北村季吟

伊賀の上野は「小京都」の一つに数えられているが、今も京都府に一部隣接するほど地理的に近いことから、京都の文化的影響が強かった。芭蕉が仕えた若様が、京の季吟に師事したのも、自然な流れである。若様の俳号蟬吟（せんぎん）の「吟」は、師の季吟から授けられたものだ。若様は跡取りであるから、自由に領外に出ることは許されない。その若様に代わって芭蕉が、季吟に指導を仰ぐ文通の、往復の任に当たったことは十分考えられる。それにより、若様だけではなくこの芭蕉も、親密の度を増したことだろう。この蟬吟公が二十四歳、芭蕉が二十二歳の時、「貞徳（季吟の師だった貞門の祖松永貞徳）十三回忌追善五吟俳諧百韻」（「野は雪に」）を、当時伊賀俳壇のリーダーだった蟬吟公が主催した。発句が蟬吟公で、脇句を季吟が務めるという厚遇である。これは芭蕉の一座した連句としては最古のものである。京の季吟は脇句だけでの参加であるから、同座はしていなかったと思われる。芭蕉は貞門俳諧から出発したのである。

発句は

野は雪に枯るれど枯れぬ紫苑かな　　蟬吟公

脇句は

鷹の餌乞ひと音をばなき跡　　季吟

発句の季は雪で冬。貞門は掛詞が「おはこ」である。「紫苑」は「師恩」と掛ける。野が雪に埋もれても紫苑が枯れないように、貞徳の師恩は忘れることがないという意。脇句の「餌乞ひ」は餌を欲しがること。「なき」は「鳴き」と「亡き」を掛ける。鷹が餌を欲しがる甲高い鳴き声が、貞徳の亡き跡に聴こえるという意。

伊賀時代の芭蕉の真蹟は数少ないが、次の蟬吟・芭蕉両吟の真蹟短冊を軸装にしたものが伊賀に伝わっている。

花にいやよ世間口より風の口　　芭蕉

（花の乙女が気に掛ける世間口だが、花にとってそれより嫌なものは、風を吹き出す風神の風袋の口だ、の意）

季吟の息子の湖春が二十歳頃に湖春撰として出版した『続山井』に、当時二十四歳の芭蕉が三十一句入集し優遇されているのは、季吟の意向が反映されているとみられる。湖春はのち季吟の幕府歌学方を継ぐが、芭蕉七部集の『あら野』や『炭俵』に入集されるなど、蕉門と交流があった。

季吟は後に幕府歌学方の地位に就く上昇志向が強い人物だったが、上級武士の蟬吟亡きあとも軽輩芭蕉への指導を継続し、芭蕉が江戸に出て間もない頃に、免許皆伝とも言うべき俳諧の作法書『埋木』を授けている。芭蕉の傑出した才能を認めてのことだったのだろう。いずれにしても古典の注釈などの歌学者としての力量が評価され、俳諧師としては破格の出世である。一方芭蕉は浮世の毀誉褒貶に重きを置かなかったため、二人は自然に疎遠になったものと考えられる。

下級とはいえ武士の生まれ。親戚にも武士が多い。芭蕉も『笈の小文』に記した通り、仕官し立派な武士になるのが一番の夢だった。実際、若様の小姓として仕えた藤堂新七郎家で、当主及び若様から「宗」の字を賜るほど信頼を得て、将来二百から三百石取りの武士も夢ではなかった。

それが暗転する。芭蕉を平凡な武士に終わらせないという、天の配剤だろうか。若様が早世したのだ。わずか二十五歳。芭蕉二十三歳のことだった。主君の命により、芭蕉は若様の位牌を高野山の報恩院へ納める使者を務めている。

芭蕉は後継となった若様の弟へ奉公すべく命を受けたが、辞退した。命にそむいた出奔者として本来なら追われる身になるのだが、藤堂家には武士退身の作法というのがあったという。去る者は追わず。同僚に書き置きを残した上で出奔することを暗黙に許すというものだ。芭蕉が主家を去ったのは、二君に仕えることを潔しとしなかった故であり、扶持米取りではない小身だったから、とがめもなかった。それどころか、主家の新七郎家は、若様の死という不運からのやむなき芭蕉の退身を、むしろ不憫とし、その後も何かと支援を惜しまなかったようだ。武家の義理には温情もあったのだろう。そして、芭蕉は藤堂藩致仕後も、終生手紙には「拙者」という武士の言葉を使い、武士の生まれを矜持とし、品性を重んじた。意識としては生涯武士だったと言ってよい。

五　季吟門の友人

芭蕉には、この季吟の門人仲間との交友がいろいろとあった。

まず、故郷伊賀を離れ江戸に旅立つ芭蕉に、日本橋小田原町の貸家を提供したとされる小沢卜尺は、江戸日本橋大舟町の名主で、季吟の門人だった。江戸に出る芭蕉に伊賀から同道したのが、この卜尺の息子と久居藤堂藩の藩士と

言われている。卜尺はのち芭蕉にも学ぶ。芭蕉が宗匠立机する前の一時期、町代として携わった上水工事は、幕府の重要インフラで公安関係の職務でもある。これは、服部半蔵がトップの江戸城警護部隊を有し、かつ築城・土木でも名高い藤堂藩の推薦のほか、この卜尺のあっせんによったものとされる。また、伊賀の実家の近くに、高虎の右腕と言われた土木の専門家、西島八兵衛の屋敷があり、その謦咳に接することができた可能性がある。何故ならその息子が芭蕉の門人になっているからだ。

次は、同じ季吟門の中で芭蕉の兄貴分に当たり、生涯の盟友となった山口素堂(以下素堂)。次の句で有名だ。

目には青葉山ほととぎす初鰹　素堂

漢学・書道・和歌・茶道・能楽にも精通する多才な文人。俳諧は同じ季吟門で、読書家で教養人の芭蕉も、俳諧では勝ったが、学問では素堂に叶わなかった。芭蕉は手紙の宛名の下に、高弟其角には「丈(歌舞伎俳優等に添える敬称)」を、また芭蕉の生涯にわたってパトロンだった杉風には「様」を添えたが、この素堂には「先生」と付けているほどだ。

談林派の開祖西山宗因の江戸下向での歓迎句会に同座して以来、素堂と芭蕉は互いに我が友と呼び尊敬しあう仲に。二人が『江戸両吟集』を編み、江戸談林の推進者になった。芭蕉が興した新風は、素堂の助力なしには考えられない。蕉風はもとより芭蕉一人の努力で成ったのではない。蕉風確立には、一番弟子其角との切磋琢磨や、この素堂の知性や風格からの啓発が大きく与かる。先生と敬った所以だ。

ちなみに、江戸の大火で焼失した芭蕉庵の、再建資金のカンパは素堂が募った。この時門人北鯤が寄附した大瓢(米入れとして愛用)は、芭蕉六物の一つで、素堂が四山と命名した。また、芭蕉の次の句に和して、名文「蓑虫説」で答えるなど親交は格別だった。

蓑虫の音を聞きにこよくさのいほ(来)(草の庵)　芭蕉

続いて、『おくのほそ道』の結びの地である大垣の廻船問屋主人木因(ぼくいん)。芭蕉とは同じ季吟門の旧友だった。

しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮　芭蕉

命がけの『野ざらし紀行』の旅に出る動機の一つが、木因の誘いと言われる。野ざらしになることもなく親友木因宅にたどり着いた、その安堵感がしみじみと伝わる句だ。

芭蕉といえど、詩の世界で、がっぷり四つに組める友人・門人はそう多くない。それを示す、二人の往復書簡による

知的な交歓が残る。「鳶の評論」として有名なものだ。『おくのほそ道』の旅を終えた芭蕉を大垣で迎えたのがこの木因。しかし、心を許し合った二人がのち疎遠になった。芭蕉が交わろうとしなかった井原西鶴やその弟子北条団水はじめ、交際の範囲が蕉門に限らず広かった木因。これも関係があるのだろうか。残念なことである。

最後は、一番弟子其角の父竹下東順。芭蕉と東順・其角父子との紐帯の強さは、また格別だった。東順と芭蕉は同じ季吟門で親交が深く、芭蕉は旅先で、わざわざ東順の故郷・堅田(滋賀県)まで足を延ばしたほどだ。元禄六年に武蔵野(江戸)で亡くなった東順に、芭蕉は追悼の俳文『東順伝』を捧げた。膳所藩主本多公の御殿医を辞したのち、世間的な名声を捨てた東順を、都会に住む真の隠者とほめたたえている。そこに載せた次の句は、芭蕉の心からの弔意を如実に示す、紛れもない名句である。

入月の跡は机の四隅哉　芭蕉

(月が沈んだあとには、東順が日頃寄り掛かっていた机だけが淋しく残り、暁の光が、主を失ったその愛用の机の四隅を照らすばかりだ、という意。「入月」は東順を暗示し、主のいない空虚感を「四隅」に象徴させている)

六　『貝おほひ』の出版

藤堂藩勤めを致仕したあと江戸に出るまでの、約六年間の芭蕉の動静は不明だが、季吟先生の指導で俳諧師として立つ準備に抜かりはなかったものと思われる。その証左に、季吟が芭蕉に免許皆伝と言ってもよい俳諧作法書を授けている。これについては先に述べた。

そして、菅原道真公を祭る上野天満宮に、発句合である『貝おほひ』を奉納し、江戸での成功を祈願している。さらに発願の成就のために、京都清水の音羽の滝の七日の水垢離修業に身を晒したのだった。

「句合」は、歌合にならって、句を二つ並べて優劣を競うもの。左右一組で一番だから、三十番では六十句となる。判詞(優劣判定の言葉)は自判、すなわち自分で書いた。

蛤の貝殻をばらばらにして、ペアの貝殻を見つけ出すのが、貝合わせ。トランプの神経衰弱に似た、平安時代からの宮廷の遊びである。貝覆いは、この貝合わせのことで、これを句合わせに引っ掛け撰集名とした。『貝おほひ』は、芭蕉の処女撰集であり、また芭蕉という人物を知る上でも欠かすことができない。

『貝おほひ』の九番を見てみよう。その自由に戯れる姿は、あの枯淡の芭蕉と同一人物とはとても思われない奔放さだ。

左　勝

鎌できる音やちよい〳〵（ちよい）花の枝　露節

右

きても見よ甚兵衛が羽織はなごろも　宗房

左、花の枝をちよい〳〵（ちよい）とほめたる作為は、まことに俳諧の親、ともいはまほしきに、右の甚兵衛が羽織は、きて見て我折りやといふ心なれど、一句の仕立もわろく、染め出す言葉の色もよろしからず見ゆるは、愚意の手づ、（つ）とも申すべく、そのうへ左の鎌のはがねも堅そうなれば、甚兵衛があたまもあぶなくて、負に定め侍りき。

宗房は名乗りを使った、芭蕉の若い頃の号。二句の後に芭蕉の判詞が続く。「左」の句意は、鎌で切るちょいちょいという音が、枝の花をほめているかのように面白く聞こえるというもの。ちょいちょいは、歌舞伎の野郎（少年俳優）へのほめ言葉で、鎌を切る刃音と掛ける。「右」の句意は、甚兵衛殿よ、花見衣に甚兵衛羽織を着こみ花見に来て我を折りなさいというもの。「我を折る」は感服するの意。「来て」と「着て」を掛ける。「羽織」と「我折り」を掛ける。甚兵衛羽織は丈の短い尻の裂けた羽織。判詞では、同じ野郎のほめ言葉である「親はないか、親はないか」（この座にほめられた少年役者の親はいないか、さぞうれしかろう）から、俳諧の親（優れているの意）と言った。俳諧の親と驚嘆の「おや、（おや）」を掛ける。「おや、（おや）」は「ちよい、（ちょい）」に照応。左の句の鎌の刃が堅そうで甚兵衛の頭が危ないので左の勝ちとすると書いた。

貞門俳諧の要である掛詞のオンパレードだ。そして、小唄・流行語を駆使し俳壇に新風を吹き込もうとする、意気込みの強さは並ではない。井原西鶴と見まがう才気に満ちている。ここにはもはや小姓でもなく、ましてや出奔者でもない、堂々と天下の俳壇に勇躍しようとする、自信たっぷりの芭蕉がいた。

かかる放埒と言ってもいいような言語遊戯ではあるが、俗語を駆使し庶民の芸術として俳諧を和歌に伍す芸術に高め、「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり」と『笈の小文』に記した高い極みを目指す芭蕉にとっては、むしろ必須の創作過程だったと言える。なぜなら、この過程によって、芸術家としての創作の喜びを体得しながら肺活量の大きさを蓄えたばかりではなく、以降の高みを目指す困難な芸術活動も、この放埒で軽快なリズムに載せて軽々と乗り越えることができたからである。

おわりに

芭蕉は、「俳諧は夏炉冬扇の如し」という言葉を残した通り、決して芸術至上主義者ではない。『人新世の資本論』の著者斎藤幸平氏がしばしば引用する、ブルシット・ジョ

ブ（クソどうでもよい仕事）とは言わないまでも、今コロナ禍でエッセンシャルワーカーが見直されたが、俳諧活動が命を繋ぐという意味ではプライオリティが低く、エッセンシャルではないことを十二分に自覚していた。

逆説的だが、故金子兜太氏が今や現象化したぺらぺらの世を憂えつつ我々に残した社会性というテーマをはじめ、わたくしたち現代俳句の在り方を模索するものにとっては、この「俳諧は夏炉冬扇の如し」という芭蕉の言葉を、「夏炉冬扇の如くあってはならない」という自戒の言葉としてかみしめ、本稿の最後のことばとしたい。

〈参考図書〉
杉浦正一郎他『芭蕉文集』岩波書店
松尾芭蕉『芭蕉全句集』角川ソフィア文庫
穎原退蔵『芭蕉読本』角川文庫
尾形仂編『芭蕉ハンドブック』三省堂
『芭蕉のめざした俳諧』芭蕉翁記念館
『私たちの藤堂高虎公』藤堂藩五日会
北村純一『伊賀の人・松尾芭蕉』文春新書

令和五年度
第二十九期研修通信俳句会会員募集

全国の熱心な会員の作品交流の場として好評の「研修通信俳句会」は来る四月からいよいよ第二十九期に入ります。ここで、改めて左記のとおり会員を募集します。

○俳句会　通信（郵便）で隔月年六回
（うち一回が紙上俳句大会）

・投句　五句
・選句　毎回十句相互選
・講師　衣川次郎「青岬」主宰
佐藤文子「信濃俳句通信」主宰

○会　員　協会員　定員七十名程度（二組に編成）
○期　間　令和五年四月から令和六年三月まで
○会　費　七二〇〇円
○行　事　会員全員による誌上俳句大会。（上位入賞者賞品あり）
選者は会員の他、講師、協会幹事、研修部スタッフ。

◎応募要領　はがきに「通信俳句会」と明記し、住所・氏名（ふりがな）・電話・年齢・結社名・ある方はメールアドレス

・締切　令和五年二月二十八日（先着順）
・宛先　現代俳句協会研修部宛

☆三月上旬に手続案内とともに入会者に送付します。

切れと感情の大陸

―新説『笈の小文』

恩田侑布子

一　心猿

冬木に三猿が遊ぶ。真ん中の子猿は紅葉がちらほら残る枝に腕をOの字にしてぶら下がっている。おや、前方の何かを目が捉えた。右脇から母猿が枝をしならせて近づく。長い腕を伸ばしてうながす。「行ってごらん」。左の折れた枯木に坐る父猿とおぼしきが、指を差してそそのかす。「そこだ」。小さな猿は満面の笑み。何に向かって飛ぶのか。親子につられ、わたしまでついワクワクする。

さっきから宗達の『扇面散屏風』の前をうろついていた。なぜかこの秋初めての紅葉狩りの気分である。金地の大屏風に何十枚もの扇面が放恣に散っている。一面ずつの絵を覗いてゆけば飽きることがなかった。伊勢や源氏や平家物語に、水墨の高士の唐絵も混じる百種のなかに、花薊や、桔梗や、猿の遊びもあった。そうか、と思った。貼り混ぜられた百扇はどこか句集をひもとく気持ちと似ている。

いましがたまで悲鳴をあげていた足指のことなぞすっかり忘れていた。四日前、固定電話が鳴るのにあわてて、散らかしてあった厚くて固い本に足をぶつけた。みるみる小指が腫れ上がる。あー、骨折れた？　五年前とおんなじだ。愚かな自分を笑いながら、今度はちゃんと医者に行った。金属をウレタンで包んだ添木を足裏に当てられる。「なるべく安静にしてください」「はい」シュショウに頷いたものの前から決まっていた都内での用が済むと、向かった先は駅ではなかった。一歩ごとの痛みにうめきながら「痛いから絵がしみるんだよ。人魚姫なんてこんなもんじゃなかったんだから」自分を慰めながら美術館から足を引きずって寄席に回った。菊之丞にさんざんお腹を揺すって、新幹線に座ったら、夜はとっぷりと更けていた。

二　絵巻の切れ・扇面散屏風の切れ

二〇二二年も大勢の方々に支えられた。春には八年越しの評論『渾沌の恋人（ラマン）　北斎の波、芭蕉の興』（春秋社）、晩秋には六年ぶりの句集『はだかむし』（角川書店）の上梓が叶った。論作に架橋し、句集帯は「俳句絵巻」という惹句で飾られた。「絵巻」は俳句の「切れ」に畳まれた「入れ子構造」を象徴する詞（ことば）である。そもそも俳句のみならず

日本文化の鉱脈に切れと入れ子があり、両者は日本文化を解くカギであること。それを代表する美術が平安末期の『源氏物語絵巻』『伴大納言絵巻』『信貴山縁起』『鳥獣人物戯画』の四大絵巻であり、列島の文化には目に見えない「絵巻の思想」が滔々と流れていることを詳説したのだった。

そうした文脈から芭蕉晩年の『おくのほそ道』も、最初の『野ざらし紀行』も、句文による絵巻と見ることが可能になる。ちょうど今冬、句文のみかは、絵筆まで芭蕉による『野ざらし紀行図巻』が京都の嵯峨で八十年ぶりに公開された。国文学者の藤田真一氏は「本文と挿絵」と解説しておられるが、どうであろうか。芭蕉が筆を振るったあまたの絵は地の文に挿入され奉仕する脇役ではない。画文融合の絵巻一巻をなそうとする明白な意図に貫かれている。

そう、「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり」と揚言した芭蕉は、日本美術の雄峰である絵巻の風雅にも参じようとした。そして芭蕉没後八四年にして蕪村は、芭蕉追慕のあまり、翁の手足となって、『奥の細道図』の絵巻をものしたのだった。

わが国では近代以降、特に現代は官制の縦割社会よろしく芸能百般がきれいに棲み分けられてしまった。美術と文学もまるで別もの扱い。が、近世までそれらはおおらかに交響し合い奥行きを互いに深めてきたのだった。

では、小論の主題である『笈の小文』はどうであろう。やはり『野ざらし紀行』『鹿島詣』『更科紀行』『おくのほそ道』等と同様、絵巻のフォルムの踏襲とみるべきだろうか。いや、『俳文学大辞典』でさえ「雑然としており」「草稿的な形態が見られ」「繁簡さまざまである」と、不満を縷々漏らしている。学者の評価もあまりふるわない。論文や評論の数も『おくのほそ道』と比べて寥々たるもの。

こうした『笈の小文』への軽視は、芭蕉の文学から発したものではなく、解釈鑑賞する側の、読みの硬直からもたらされたものではなかったろうか。時系列の流れに沿う絵巻の型に嵌めて読み解こうとするから、構成がバラバラで乱れがあると不備に映るのではないか。

『小文』は他の四つの紀行文のようないわゆる絵巻様式によって構想されたものではないであろう。驚くべきことだが、芭蕉の意欲と創意は、宗達以来の美術の『扇面散屏風』の様式を己の文学にひそかに換骨奪胎しようとしたのである。現在では時系列や主人公がバラバラな小説は少しもめずらしくない。『小文』はその嚆矢をなす日本文学史上における新フォルムの出現と見ることができるであろう。『おくのほそ道』を広壮な陽画とするなら、『小文』は珠玉の陰画なのである。

『小文』が、『扇面散屏風』の形式を構想して書かれたとする理由の一つは、それが絵巻よりもさらに大胆自由に時空を超越できることである。回想形式によらなくても、時空を異にするユニットを場面ごとにきわやかに浮かび上がらせ、飛石状の切れた連続を散らし、ひいてはルフランさせられるのである。

その奥には、同形式を選び取った芭蕉のエモーショナルな動機が潜在していた。一つに、『小文』は発想の契機か

らしてたんなる旅行記ではなかった。紀行という仮面の下の素顔は、芭蕉が終生愛した杜国への恋と鎮魂の情に貫かれている。歌仙「冬の日」で雪華のような詩魂をみせたかがやくばかりの名古屋の豪商杜国。その運命はたちまちにして暗転した。翌年には罪を着て領国追放となり、翌々年の冬、芭蕉は伊良湖崎近く、杜国の配所を訪って契りを交わす。翌春、海路伊勢でしのび逢い、万菊丸と名を変えた杜国と『小文』の百日の蜜月旅行を遂げる。が、今生にはあと二年の猶予も残っていなかった。むざんな夭折の麗人に、ほとばしる純一感情を捧げるのに、闇の大海に繚乱と擲つ扇以上にふさわしいものがあっただろうか。

二つ目は普遍的な人間感情の肯定である。芭蕉は恋に盲目の痴れ者ではなかった。自らの「山館・野亭のくるしき愁」「酔ル者の妄語」を人間の普遍的感情として、文藻ゆたかに相対化しようとしたのである。

『笈の小文』を六曲一双の『扇面散屏風』になぞらえれば、右隻第一扇は「百骸九竅の中に物有」であり、第六扇は伊勢の〈神垣やおもひもかけずねはんぞう〉であろう。左隻第一扇は「弥生半過る程」の伊勢での杜国との再会。第六扇は平家滅亡の「千歳のかなしび此浦にとゞまり、素波の音にさへ愁多く侍るぞや」であろう。散りばめられた扇面の過半は杜国との出会いと恋の成就、永訣の声なき慟哭だが、もう半分は杜甫や源氏や謡曲など、古典に描かれた人間感情に共感しつつ、その思いを汲んでいる。大団円では、眼前する須磨の海から、壇ノ浦に沈んでいった平家の公達や女房、二位尼と安徳帝の錦繡の裳裾を、夏のぶあつい海原の闇に絢爛と投扇してみせた。

感じやすく破れやすい「風羅坊」芭蕉の恋は、膝前におもむろに手繰ってゆく絵巻にではなく、激情を大海に擲ち真闇に散らす百扇図に結晶した。日本の諸芸を「其貫道する物は一なり」とした芭蕉は、宗達以降の琳派の精華の一つである『扇面散屏風』の形式を、おのれの恋を刻むにふさわしい至高のフォルムとして選び取ったのであった。

三　花と夏月の思い人

『小文』の短文も一句も、虚心に味わえば婀娜たる一面の扇となって胸に降りかかる。集中、ことに水際立つ十余句の扇面をさし覗いてみよう。

旅人と我名よばれん初しぐれ

芭蕉は旅ゆくものの哀れの扇を初冬の空に投げて歩き始める。そこに、唯一絶対神をもたない東洋人の「永遠の途上」を定立してみせたのである。

時は冬よしのをこめん旅のつと

次いで副主題ともいうべき吉野への思いを打ち出す。花の匂いのない冬の吉野こそ誹諧である。それは芭蕉が精神の支柱とした『荘子』の鵬が南冥に徒る雄渾壮大な旅ではない。愚かさを引き受けた人間しんじつの感情劇であった。

星崎の闇を見よとや啼千鳥

杜国の配所、渥美半島の先端近い保美を尋めゆくプロローグである。宇宙の闇は濃い。千鳥の繊い趾と嘴にダブルイメージされる杜国のいのちも闇の彼方に顫えていよう。掲出句の直前には「人又妄聴せよ」の一扇が開く。何を妄聴せよというのか。妄語、うわ言である。妄念、妄執である。『笈の小文』に生きる芭蕉は俳聖ではない。一人の愚か者だ。そこに「万歳を参えて一に純を成し、万物を尽く然りとして、是を以て相い蘊む」『荘子』の思想の密かにして深い咀嚼、ひいては身体化を感じることができる。

鷹一つ見付てうれしいらご崎

「北冥に魚有り、其の名を鯤と為す」で『荘子』「逍遙遊」は開巻する。鯤は「化して鳥と為り、其の名を鵬と為す」が、名古屋の町代まで務めた豪商杜国は、いまや流罪落魄の身。「いらご白」の碁石のひかる浜高く、俗世の汚名も寒風も超出し、一羽の鷹となって翼を広げる。白は杜国を象徴する色だ。芭蕉の願いが見出したのは冬青空に遊弋する一羽の白鷹だったのではないか。

旅寝してみしやうき世の煤はらひ

芥川龍之介から川端康成へと深められた「末期の眼」の淵源をしるす句である。無常の火宅の煤を払う俳諧の哀笑。

そこから一転、芭蕉は〈旧里や臍の緒に泣としの暮〉と自らの生の原点に立ち返り、伊賀に生まれた漂泊の生涯を〈さま〴〵の事おもひ出す桜哉〉と、花に振り返る。花は私淑する西行の歌とともに、わけても吉野にあった。

乾坤無住同行二人

よし野にて桜見せふぞ檜の木笠
よし野にて我も見せふぞ檜の木笠　　万菊

二句の前に置かれた百数十字の文章は、こんなにこころ弾みよろこびここに満ちたことはない、というあでやかな彩りの扇面である。「ともに旅のあはれをも見、且は我為に童子となりて」「自万菊丸と名をいふ」うつし身の杜国と芭蕉は影と鏡のように照らしあい唱和する。本来は空海、お大師様と一緒の旅を意味する笠の標「乾坤無住同行二人」は、芭蕉と杜国にあっては、このとき、恋の高らかな宣言、永遠の愛の誓いとなる。万菊(杜国)の句は従来、「吉野山で私も桜の花を見せてやろうよ、檜笠よ」と、芭蕉の畳句以上の意味を持たないと解釈されてきた。しかし、そうではあるまい。「我も」は花のなかの「花」を象徴する隠喩であろう。杜国こそ芭蕉の「花」である。

草臥て宿かる此や藤の花
雲雀より空にやすらふ峠哉

両句の無上のエロスのゆらぎについてはすでに拙著(『渾沌の恋人』)で鑑賞した。恋の成就の名句は、芭蕉がわび・さび・軽みにとどまらない、懊悩し喜悦する芳潤な人間であることを物語る。両人の馥郁たるよろこびを後生もありと生きることが出来る。それは日々新たな扇として胸に開かれる。

春雨のこしたにつたふ清水哉

吉野の西行庵にある同じ「苔清水」を素材としながら『野ざらし紀行』の〈露とくくゝ心みに浮世すゝがばや〉とはなんという違いだろうか。ここには花の枝をつたう雫に濡れそぼって満ち足りた二人がいる。定説では「芭蕉は吉野で念願の花の句を詠めなかった」ことになっている。そんなばかな。言葉も忘れた浄福の思いを、「われいはん言葉もなくて」と記しているではないか。万菊は「花」であり、菊慈童でもあった。芭蕉は杜国という花を「よしのゝ花に三日とゞまりて」しっぽりと味わったのである。

衣更

一つぬいで後に負ぬ衣がへ
吉野出て布子売たし衣がへ　　万菊

こちらの鏡像めく唱和も面白い。芭蕉は脱いだ衣を笈に収める。一方、万菊はうら若い肌の匂いにほてる花衣を脱いで売り払ってしまう。杜国は吉野を出るやいなや忽然と掻き消える。あたかも虚空に消える蝶のように。合わせ鏡に映っていた麗人は二度と姿を見せない。その死も明示されない。万菊こそは吉野山の花の精であった。

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

『笈の小文』の掉尾に置かれた珠玉の扇面である。現実には須磨に泊ったが、芭蕉は前書きにどうしても「明石夜泊」と記したかった。そこに流謫の光源氏と明石の上の気高い出会いの風光を匂わせたのである。夏月の涼しくふりそそぐ「蛸壺」は愛する二人の壺中天である。さらにもう一つ、蛸壺には、いままで誰にもいわれなかった秘密が隠されていた。名古屋で杜国が華やかに営んでいた米穀商の屋号はなんと「壺屋」であったのだから。

歌枕として名高い景勝の地、明石の海原に月が涼しく輝きわたっていることだよ。名古屋は壺屋の若主人。思いもかけぬ運命のむざんに斃れた杜国よ。そなたと連れ立った百日の旅寝の空をどうして忘れられるだろうか。

ここには夭折した杜国への鎮魂と熱情が幾重もの入れ子をなしている。〈白げしにはねもぐ蝶の形見哉〉と双璧をなす愛の金字塔である。

四　感情の大陸

わたしたちが住みなしてきた日本列島も、一つ一つの島は切れてつながっている。極東の粟散辺土の生んだ俳句という極小詩。そのなかに切れがあり、その「白駒の隙」に底知れぬ入れ子構造が畳まれている。小さなスリットから目に見えない途方もない感情の大陸が涌出する。芭蕉が投扇したのは須磨の夜の海だけではなかった。地球上に広がる限りない感情の大地に向かって扇を擲ったのである。

俳句と私

―俳句は、不思議なことばかり―

武馬久仁裕

俳句は、よく見ると不思議なことばかりです。この文章では、ひらがなに焦点を当てて、その一端をお話しします。

まず、水原秋櫻子（一八九二―一九八一）の名句を取り上げます。名句は、言葉の流れも美しいですが、その姿形も美しいものです。

冬菊のまとふはおのがひかりのみ　秋櫻子

縦一行の美しい句です。漢字は、天辺の「冬菊」の二字だけです。あとは、下まですべてひらがなです。

これは、文字で書かれた絵であると読めます。一番上の「冬菊」は、凛とした冬の菊の花そのものを、下のひらがなは冬菊の茎をイメージすることができます。（俳句の美の根っこには、縦書きがあります。）

そして、ひらがなは白く軽いイメージをもたらしますから、冬菊がまとっている「ひかり」そのものをも表現していると読めます。何ら、句の内容と矛盾しません。

このような、文字によって姿形を表わす働きを、私は、文字による形象化と呼んでいます。

読者のみなさんが、句を推敲するとき、この言葉を、漢字にしようか、ひらがなにしようか、カタカナにしようか迷われるのは、無意識の内に言葉による形象化を試みておられるためです。（日本語は、俳人、歌人、詩人にとって三つの文字を持っているとても便利な言葉です。）

では、このひらがなで表されたひかりとは一体何でしょう。それは、冬菊の美しさのもとであるいのちです。いのちの輝きそのものです。それを、表現しているからこそ、この句は、名句なのです。

同じように、加藤楸邨（一九〇五―一九九三）の名句を読んでみましょう。

落葉松はいつめざめても雪降りをり　楸邨

さきほどの秋櫻子の句では、ひらがなは、冬菊の茎と冬菊のいのちの輝きを表わしていました。では、この落葉松の句では、ひらがなは何を表わしているでしょう。次のように、落葉松の句を書き直してみれば、よく分かります。

落葉松は何時目覚めても雪降りをり

もうお分かりでしょう。落葉松の句のひらがなは落葉松の句の中に降る雪なのです。そして、意味を持たないひらがなの一つ一つは、雪のひとひらひとひらに見えて来ることでしょう

先ほど、秋櫻子の句でも言いましたように、ひらがなは白と軽さのイメージを持っています。ですから、この句の読者には、雪降るこの句の世界がすんなり入って来ます。

ところで、この句では、めざめるのが、①落葉松、②作者(わたし)という二つの読み方があります。これは、一句にひねりという言葉さばき(レトリック)が効いているためです。

「落葉松はいつめざめても」までは、めざめるのが落葉松のように感じられます。ところが、「いつめざめても雪降りをり」まで読みますと、作者(わたし)のようにも感じられて来ます。「いつめざめても」でひねられているのです。

片山由美子が言っています。「目覚めたのが落葉松か自分自身か、それが曖昧模糊としていることこそ、楸邨の求めるところだったのかもしれない。」(『俳句を読むということ』角川書店、二〇〇七)私もそう思います。

最後にもう一句読んでみます。

次は雪ではなく雨の句です。本誌二〇二二年八月号の「風土記篇(42)　岐阜県」でも触れました鈴木しづ子(一九一九―一九五二失踪)のひらがな俳句の傑作です。

まぐはひのしづかなるあめ居とりまく　　しづ子

漢字の「居」以外は、すべてひらがなです。ひらがなは、この句では、雨を表わしています。「あめ」という言葉によって、この句のほとんどを占めるひらがなは、雨の姿をまといます。そして、雪の場合と同じように、ひらがなの一つ一つが、読者に雨粒をイメージさせることになります。

この句の美しい姿形を見てください。家を意味する「居」一字が、天からの降り続く雨に降り籠められて在ります。縦書きの力をまざまざと見せつけられる句です。

その雨に降り籠められた一つの家で、まぐわい、男女の性の営みが静かになされています。

その静かな営みを包みこみ、浄化するかのように雨が天からいつまでも静かに降り続いているのです。

このように、ひらがなは一句の中で、ある時は、いのちの輝きに、ある時は、降り続く雪や雨に変身します。

では、漢字やカタカナはどのように変身するのか。これは、読者ご自身が、まずは実際に句に当たって確認してみてください。

俳句は、まだまだ不思議なことばかりです。

最後に、池田澄子の『此処』からひらがなの句を紹介して、この文章を終えたいと思います。

零余子かなこころのようにこぼれつぐ　　澄子

〈参考文献〉拙著『俳句の不思議、楽しさ、面白さ』二〇一八年、『俳句の深読み』二〇二一年、『鈴木しづ子一〇〇句』(松永みよことの共著)二〇二二年。以上、黎明書房。

序章　人間高柳重信　～戦前期からの出立～

後藤よしみ

はじめに

パンデミック前、ある俳句大会後の懇親会でのことである。隣席のある結社の主宰が、開口一番に「私は高柳重信の句会に出ていたのです」と語り出した。その主宰が二十過ぎの頃といい、六十年近く前のことである。それを語る顔は懐かしく、また誇らしげに紅潮していた。当時の若者を虜にした重信。

重信の人生で影響を受けたものを五つ挙げることができる（なお、この論においては、人間重信に焦点化し、俳人・俳句などの影響は除いている）。戦前期の重信に当てはめれば、①は始祖たる「大宮某」と明治気質の祖父母。②は関東大震災と富士山。③宿痾の肺結核。④十五年戦争。そして、⑤はフランス象徴主義と皇国史観。⑤の思想・精神においては、個人は時代の影響を受ける一方、自らがつかみ取ることができる。

重信は、どのように戦前期の時代思想・精神からの影響を受け、また一方ではその後に何を自らつかみ取っていったのであろうか。

一　青少年期の思想・精神形成

重信の小学時代の自然との対話は、山嶺へのあこがれから次の様に描かれている。

《富士と筑波とを眺めてくらす日々は、その山々の麓に住み、日毎それを仰ぎながら生きている人々に、なにがしかの心を常にかよわせることでもあり、そこには、おのずからの連想力による交感が、自然に準備されていったのである。》［①］

少年時代、重信の身辺に霊魂に満ちたものが存在していたのである。このアニミズムの体験は、後年の自然の感応の土台となる。

金魚玉明日は歴史の試験かな

（高柳重信『前略十年』『高柳重信全集Ⅰ』）

この句は中学二年の夏休み前の期末試験を詠んでいる。

《その新任の教師の教えは、それ自体が一つの意志を以ているのに等しい大きな歴史的な時間の流れと、それに確固たる志を抱いて意識的に関わろうとした人物の事績を、あたかも我がことのごとく痛感しながら学べというものであった。》[②]

この歴史の教師は久保田収といい、重信は「心の恩師」と述べている人物である。[③]

久保田は、東京帝国大学国史学科卒業後、重信の中学校に赴任。大学在学中は平泉澄に学び、その高弟として知られ、終生師事する。

彼は「あの皇国史観の権化といわれる平泉澄の忠実な門下生」(重信)であった。その授業は、「それまでとは一変した型破りな」もので、いわば感情移入の〈感覚・フィーリング〉の歴史教育である。

《いつも私は楠木正成公や新田義貞公北畠顕家公などの率いる軍勢の中にいて、(略)しかも、なぜか私は、死に直面する場面が好きであった。ただ見事に敗れることのみを第一義として湊川に赴いた楠木正成公が、炎熱の日射しに渇きながら執拗に血戦を挑んだのち、一族ともども七生報国を誓って薨去されたとき、私も同じ誓いの下に死んでゆくのであった。》[④]ここに詩精神の魂の彷徨が見られる。

重信の讃仰する楠木正成像は、「朝敵」から「忠臣」へと時代とともに変わっていく。

戦時下において、若者は楠木正成の思想を拠り所として決死の覚悟を固めようとしていた。

自らを軍国少年であったという重信には、ナショナルなものとその運命に対するヒロイックな共感があったのである。

久保田は、西洋史も担当し、その感情移入の授業を展開している。重信と同学年の田中正俊(中国史・東洋史学者)は次の様に記している。「フランス革命でルイ一六世が処刑される際は歴史的事件にもかかわらず、まことに残念とひたすら嘆いていた」。また、「勃発したばかりのスペイン内戦では反乱軍のフランコばかりを応援していた」という。[⑤]

また、久保田は平泉の四天王の一人に数え上げられていた。彼の授業のあり様は師の平泉に近いものである。重信は、この歴史の授業に熱中した。久保田は数年で転任してしまったが、重信は後年、戦時下の発病の際の拠り所として種々の歴史に関する書物を読むこととなる。「僕は、青少年時代の数年間、病臥のつれづれに、いくらか歴史を独学したことがあった。」[⑥]

この歴史書の中には平泉の著作も含まれていたであろうことは次のことから分かる。

《兄の蔵書には、こうした文学書の他に、分厚い歴史書がかなりありました。(略)吉田松陰、藤田東湖、神皇正統記、平泉澄といった(略)これらの書籍は、群馬の母の実家で、私たちと共に敗戦を迎えました。》[⑦]

これらは、妹が発見した皇国史観の書物であった。具体的な書名は不明であるが、吉田松陰、藤田東湖も平泉の重視した人物である。そして、彼自身松陰らに関する論文等を成している。また、『神皇正統記』はファシズムの拠り所にもなっていた。

二　平泉澄

久保田の師、平泉澄は東京帝国大学文学部国史学科において敗戦まで教授。専門は日本中世史。国体護持のための歴史を生涯にわたって説き続けたことから、代表的な皇国史観の歴史家といわれている。

皇国史観について、「広辞苑」では次のように説明されている。「国家神道に基づき、日本歴史を万世一系の現人神である天皇が永遠に君臨する万邦無比の神国の歴史として描く歴史観。近世の国学などを基礎にして、十五年戦争期に正統的歴史観として支配的な地位を占め、国民の統合・動員に大きな役割を演じた」。戦時下、当時の文学者の踏絵ともなった。現在も皇国史観は、教科書検定などへも影響を及ぼし続けている。

立花隆は、平泉澄についてこう記している。

《あの時代（昭和戦前期から戦中期）の日本において、平泉は社会的に最も大きな影響力をふるった東京帝大教授であった。どのような影響かというと、皇国日本最大のイデオローグとしての影響力である。》[⑧]

敗戦後、公職追放となるものの戦犯とはならず、戦後も長く主義を曲げずに通している。

その戦後の姿は、「王佐の夢破れた革命家のある種の抵抗」というものであった。[⑨]

平泉史学は、次のようにとらえられる。

《皇国理念の啓示の閃光を、日本史の聖書と聖人の中に明らかにし、それによって日本人の内面に、皇国理念の力強さを復活させ、政治的な行動への意欲を発条させることに見いだされる。》[⑩]

次に平泉の講義はこう伝えられている。

《それは体系的な思想史とは言いがたく、次々と連想をつなげて道徳訓話を語るというような感じである。》[⑪]

そして、実際に聴講した丸山眞男が当時の様子を次のように語っている。「これは大変な講義で、新田義貞の後醍醐天皇に対する誠忠を話す段になると、澎湃として涙を流すんですね」。門下生の久保田へも影響を与えた講義ぶりであった。

つまり、歴史上の人物に「心境推測」し、多様な物語を紡ぎ出すのである。

また、十五年戦争下に刊行され、重信も目にしたであろう平泉の著作の主なものは次の様になる。①が学術書、②は啓蒙書である。

①一九三二年『国史学の骨髄』平泉史学
　三六年『万物流転』歴史観の提示
②　三四年『建武中興の本義』人物評
　四三年『天兵に敵なし』皇国護持の書

特に『天兵に敵なし』は、日本精神や楠木正成、北畠顕家などの人物を通じて国史の神髄を明らかにするものであった。[⑫]

平泉澄の影響は、当時の多くの学生、軍人にも及んだ。立花隆は平泉の高弟の竹下正彦中佐の次の言葉を引いて説明している。

《平泉史学が陸軍将校に及ぼした影響は、案外に根深いものであったと私は考えている。特に若い層に、無意識のうちに、深く鋭く根を下ろしたと思っているのである。（略）天

皇陛下の万歳を唱え、笑って散華して行った、狂信的とも思われる若い将校の行為の強い支えとなっていたのではないかと、私は常に考えている。》[⑬]

さらに、平泉が賞揚した北畠親房、楠木正成、吉田松陰らはみな非業の死をとげる。「平泉はそこにこそ、日本精神の美学の極致を見出したのである」（立花隆）。その美学に若者たちが感化されていったのである。後述の鮎川信夫も影響を受けたと記している。

三　高柳重信への影響

平泉の思想・精神、特にその精神は久保田から重信にも影響を与えた。

《すでに過去となっている歴史的な事件を、あたかも我がことのごとく痛感せよという教えは、少年期の私の心に不思議なときめきを喚起したようである。（略）この若い教師の情熱的な授業は、いわゆる皇国史観は別として、その後の私に大きな影響を及ぼしたように思われる。》[⑭]

戦時下の時代が、重信の感受性・精神に運命をもたらしたのである。

平泉が自身の皇国史観において重視したのは後醍醐天皇である。阿川弘之の『井上成美』では、平泉は「建武中興の故事、吉野朝の哀史を静かに説き去り説き来たり」と描く。戦後も旺盛な執筆活動を行い、憲法改正の論陣を張った。この時代に抗し、簡単に引き下がらないというしぶとさは彼が貴んだ南朝精神というべきものであろう。

重信は、祖先の大宮某が南朝方伊勢北畠氏に属し、南北朝末期から後南朝期に活躍したことから南朝、特に後南朝に心を寄せるようになる。

さらに、平泉が重要視するのは天皇であり、天皇に影響を与えられる少数の人々である。歴史を変えられるのはつねに少数者であり、民衆は、英雄の価値観を模倣する存在に過ぎないとした。[⑮]

一方、重信はエリートと彼らの自覚、少数派・少数の突出部を尊重する。そして、「終始一貫してエリート」であろうとして来たと述べている。これは、先の平泉にも通底するところである。

次に、敗戦時の平泉の門下生の動きである。彼らの一部は、宮城事件（八月十四日夜に軍部の起こしたクーデター未遂事件）を引き起こしている。平泉は、「同学が一番奮闘し、数多くの血を流したのは、二・二六と今度」であるとその直後に語っている（植村和秀）。その際に、門下生の首謀者の将校二名、および同門の阿南陸軍大臣が自決している。なお敗戦時には、軍人さらに民間人に自決する者が多数出ている。

一方、重信の敗戦時は、「魂も身体も根こそぎ病んでいた」彷徨の時期であった。その時の行動として、次の記述が残っている。

《十月、福寿院本堂にて勤皇文庫『保健大記』・『中興鑑言』を筆写、亡国を嘆ず。なお時期不明なるも、憂国の情を発し「群」にいた小崎均一等とある種の行動を企画したと推定される。これは志においては、後の三島由紀夫の自刎事件の情と相似したものであった。》[⑯]

この勤王文庫の内容は、前者が江戸中期の儒学者栗山潜鋒

による尊王論。後者は同期の朱子学者三宅観瀾による建武中興の後醍醐天皇の事績の書であった。敗戦までは、本土決戦による「一億総玉砕」を信じ、行動しようとした国民も多かった。重信は、無常観にとらわれ何らかの「憂国の情」から自決に思いを寄せたであろうと推測される。その裏付けとなるものとしては次のことがあげられる。

重信は、三島由紀夫について彼の自決の翌年の七一年にこう語っている。

《三島由紀夫の死については、すでに、さまざまな意見が述べられているようですが、（略）彼の天皇についての見解も、この日本という国の精神の時間を真剣に考えようとするとき、最高の持衰として、そこに一柱の神もどきたるべき存在を思うことが、ただちに狂気の沙汰だとは、簡単には言いきれないような気がするのです。》[17]

この事件後しばらくは、三島と交流のあった人物でも哀悼の意を表明することが憚られていた。そのような時期であったが、重信は右記の三島の心情を推し測る弁を吐いている。

四　敗戦後の影響

平泉の皇国史観は、十五年戦争時、国威発揚として「ひろく受け入れられ、人生に指針を与えるものとして若者のなかにも影響力を持ったが、当然のことながら、戦後には反革命、反動、戦争協力の歴史学として厳しく断罪されることとなった」。[18]

平泉の敗戦後の重信への影響だが、明らかなことは久保田の授業を通しての〈フィーリング〉感受であり、想像力である。

《したがって、もしも私自身がその渦中に立っているとしたら、どのように感じ、どのように思い、どのように行動するであろうかと、さまざまな感情の動きなどを想定しながら、いっそう我が身に引き寄せて判断してみることが、いつしか私の習慣のごとくになってきた。》[19]

また、平泉澄自身は「清廉な人格と言動の首尾一貫性、政治への積極的関与と一定の政治的影響力の獲得においても、そしてまた、人身攻撃の目標とされ、真意を理解されずに批判される」人物であった。[20]

一方の重信は、敗戦後のその言動から周囲より「グループの中でもっとも血の気が多かった僕が、（略）一部から青年将校とあだ名された」と述べている。[21]また、他にも「喧嘩高柳」と評されている。

さらには、敗戦後の社会状況への反発から「偽前衛派」を著した動機を語る際に、当時の自分の言動について次のように触れている。

《戦争が終わったばかりで、日本の全体的な風潮が左翼的なことだったと言うことだ。（略）で、逆にそのような姿勢をとらなかった僕が、社会に遊離してゐるといふやうな風に思われやすかったし、もっと極端な言葉で言へば、ファッショの犬などと言はれたりした。》[22]

敗戦後の俳壇での重信の言動が、客気ある「国士」のごとく受け止められたのである。

このように少なからぬ影響を受けていたわけであるが、敗戦後の占領下、日本を支配する思想は一変する。その時代の流れの中で、久保田、ひいては平泉の皇国史観そのものは、

重信はその後に苦悩の経験の中で封印している。それに関する言葉はわずかであるが、こう述べている。

《しかし、あの皇国史観はなやかなりし時代も遂に終わりを告げた。》[㉓]

この言葉は一般論というよりも当時の重信の率直な感慨であろう。そして重信の作風にも変化がみられる様になっていくのである。

五　その他の影響

ここで今一度、戦前期の重信に影響を与えたものを探ると次のことが分かる。

重信は、「少年期から青年期にかけての私に、いちばん大きな影響を与えたものは、たぶん、辰野隆、鈴木信太郎、渡辺一夫などを中心とする主としてフランス文学の古典に関する本であった」と回想している。[㉔]戦前期、西洋文学の翻訳書が溢れていた。

フランス文学観の摂取と自由な詩精神、そして言葉の象徴性。象徴主義は言葉の宇宙を作り、外部と対峙する。終生影響を受けたリラダンから一つのコスモスを作り上げる。重信はそこでサンボリスムを通過したかどうかを重視するようになる。これにより俳句形式への詩の獲得を果たしていく。そして、敗戦後の病床により深層の詩的想像力、詩意識の変革として現れてくる。

そして、ここで触れておくが、同じ西洋詩の洗礼を受けた鮎川信夫はリベラルな批評的視点を得た。しかし、戦時下の皇国史観には反発したもののその呪縛から解き放たれなかったと告白している。[㉕]

次に肺結核と戦争体験があげられる。

結核は、彼の時代の宿痾、「死を招く青年病」である。四二年に罹患し、その年の死亡者数は一六万人。子規の言葉を借れば「罪深き者」に身を連ね、「死ぬまでの予後」に身を置く。そのため、重信は同じ宿痾の石川啄木の享年まではと己の生を短く区切り、短距離ダッシュを繰り返す。自分の生を急き立てていくとともに、次第に霊化していく。

戦争については、十五年戦争下、失命の時代に若者は、「目に見えない重圧からのがれたい」ため「目前にある死について」意味づけをしようと楠木正成以外にも吉田松陰や『神皇正統記』などを渉猟していたのである。[㉖]

重信の場合は、肺結核発症による徴兵検査丁種不合格。これの意味することは太平洋戦争下、戦場に立てない若者は非国民であるということであった。そして友人らが続々と徴兵される中で劣等感を抱き、また長者であった家の一員として身の置き所がなかった。人生が閉ざされ、「銃後の冬蠅」として、社会からも遮断される存在となる。実際、弁護士となる夢も断念せざるを得なかった。

その様な状況下の重信の拠り所として楠公・後南朝があったのである。また一方に、心の片隅の世界としてリラダンの領域が作られていった。ここでは、皇国史観とフランス文学観の思想・象徴主義との重層性が見られる。肉体化する皇国精神に象徴主義を釣り合わせ、併存していた。そして、詩歌に耽溺することにより正気を保ち、療養生活により思索的で観念的・耽美的なものに接近していく。

また、死神を見つめる時間が作家的準備期間となり、敗戦後のアドバンテージとなった。

六　戦後の出立〜「敗北の詩」〜

敗戦後は占領下において、どの世界でも立場が逆転する。戦前のファシズムや皇国史観は全て否定される。重信らの戦中派は、戦時下に自己を確立せざるを得なかった深い傷跡を持つ世代である。敗戦と社会の変革による将来への失望と内部崩壊。重信は、その虚脱・虚無状態により事件と思われる事態を生じさせている（「三　高柳重信への影響」参照）。その後の豊かな軌跡を見るには、挫折が必要であった。

翌四六年に「群」を復刊させた頃より精神的にも落ち着きを見せてくる。敗戦後の困窮と死病の床からは脱してはいないものの、闘病生活は自己省察を促し、内面追及を進める。そして、「期待感と情熱が掻き立てられる」時を迎える。「敗北」は、自らの弱さと痛みを受け止めることで前進へと展開できる。翌四七年、二四歳で「敗北の詩」を表す。但し、その立ち直りの時の早さが、重信の傷痕の浅さを意味するものではない。

そして、新たな思想形成・自己形成は、戦中派の重信の最大の課題でもあった。これは重信のみならず、戦後においてはどの若者も同じである。重信より一歳年下の吉本隆明は、「つまりぼくもじぶんの思想をどうやって形成してきたかというと、味方をやっつけることで形成してきたようにおもうのです」と述べている。[27]

敗戦直後、社会は理想と論争の季節であり、時代の変革期に評論が創作を先導していった時期である。「評論を書くことで、新しい自分になってゆく」と重信も語る様に、さまざまな評論活動とその論争を通じて自分の思想・理念を形成していく。石原八束は、重信が同人誌「薔薇」を擁して論戦を挑んでくる「人斬り以蔵」であったと語っている。[28]後述の「敗北の詩」のように次々と評論を発表し、「刺し違えて死ぬべき敵を求め」（塚本邦雄）、挑んでいったのである。これらのことが、重信を成長させていった。

この姿勢は、後年の金子兜太との論争にも現れていく。

重信の孤絶した状態からの立ち直りを促したものが「第二芸術」論争である。詩心を鼓舞したのは批評家であった。重信は敗戦後の運命に毅然とした決意によって、背水の陣を構えて反論に打って出た。敗北の経験を経て、それをばねに現実に向かい直す時、重信に批判性が生まれた。

「敗北の詩」により俳句を危険な形式とし、この不毛なる形式に向き合うという確乎たる思想に立ったのである。この論は、「瀕死の俳句形式と瀕死の高柳が出会って生まれた」（坪内稔典）。孤独な己の内面を嘗め尽したものの勝利といえよう。これにより、皇国史観とは異なる権力に一番遠いものとして、「個人に及ぼす影響が最も少ない詩型」として俳句を選択する。これは、重信のエリート意識による不毛の詩型の選択でもあった。いずれにせよ、これは戦前の皇国史観への訣別である。

しかし、青少年期の柔らかな感性、病床での鋭い感性に浸潤した皇国精神は、その清算までには至らなかった。日本的なるもの（日本主義）として重信の心の深層に残ったままで

あったことは後に明らかとなる。

この「敗北の詩」の誕生には、第一次世界大戦後のシュールレアリスムの出現と同様、灰燼の中から生まれた創造性がある。これは、戦前の思想の否定による自己崩壊の体験の度合いに応じて、それから脱出した表現の獲得を意味する。

覚悟を決めて書くということは、生きる姿勢を整えることである。俳句詩論の根幹が生まれる。重信の凝視が正鵠な批評眼となり、徹底した批判を生む。歯に衣着せぬ批評が展開されていくのである。「敗北の詩」から引用する。

《いちばん重要な問題は、時代の流行に逆行する俳句文学そのもの、いわば反社会性、ならびに、敢えてそのジャンルを選択した俳句作家の反社会性を、如何に明確に、正直に自覚するかにかかっていると思う。》[㉙]

「詩人とは、絶えず批評を行なって遂に倦むことのない精神」に近づいていく。文学とは言葉による表現であり、言葉の秩序の発見は思想の発見である。そして、象徴主義により内面を見つめ外界に対峙していく。病床から佳句を世に送るのである。三好行雄流に言えば、「札付きの西欧主義者」となる。そして、象徴主義は皇国精神の要石ともなる。

「敗北の詩」（四七年）の前後の表現の変化を捉えるために、その時期の句を上げる。

梅雨嵐勤皇のこと世にすたれ

（四六年「群」「戦後の西東三鬼」『全集Ⅱ』）

身をそらす虹の

絶巓

處刑台

（五十年『蕗子』『全集Ⅰ』）

『蕗子』の作品は、病床からのさよならの合図であり、「夭折を覚悟した青年の一途な思いの結晶」である。創作の刹那に死の不安を超越していくことで、危機の中から作品が生まれていった。

ここに「敗北の詩」をスプリングボード（跳躍板）として、それ以前との思想・表現における訣別を見て取ることができる。

七　戦後期後半の変遷

加藤郁也は、重信についてこの様に述べている。

《高柳重信は独自の皇道観を持っていた。超然たるその日本主義は内に秘していたと言い改めるべきかもしれない。俳句の話が大方出尽くして対酌酣となると憂国の志情鬱勃と湧出するもののごとく、大楠公の忠義から南北朝へと話頭転回。吉野朝の悲哀をひとりで引き受けたかのように嗚咽した。その皇道精神が戦前戦中に養われたのは論を俟たない。これが伸展し成熟するのは『日本海軍』腹案を固める時分からであろう。》[㉚]

郁乎の言葉に沿って見ていけば、その伸展としては、六五年の喀血後の入院生活での「自然から語りつづけられる体験」が大きい。

《その山には、それにふさわしい霊魂がひそんでいると信じられていた時代であれば、それはすなわち、人間の精神と直接につながる思いであったわけである。》[㉛]

重信が霊魂や呪術的なものへの憧れを口にするのは翌六六

年からである。肺結核の死の危機からの脱出により意識は深層・古層に向かう。当時、創作が停滞ぎみであったが、その後は創作意欲が戻り、作風も転換していく。

その自然を入口として七一年の飛騨行。

死を意識して来た半生により重信は霊魂の世界へさらに開かれていく。書斎派であった重信の自然との邂逅。この飛騨の自然の奥の神々の存在。隅々にまします霊の生動と言霊を見て取った。それによる「飛騨」一〇句は重信の「絶唱」と言われている。

飛騨の
美し朝霧
朴葉焦がしの
みことかな

（「飛騨」『山海集』『全集Ⅰ』）

作品には、道標を発見した重信の自恃が現れている。ここにおいて、感受性の基底への「自然的秩序の憧憬と崇拝感情」（大岡信）から重信の関心が古代へ向かう。それにより、重信の古層に秘していた皇国精神が浮上し、重信と契合していったものと言えよう。この飛騨行が第二のスプリングボードであった。

これは、単なる過去へのノスタルジーではない。古層より現代を照射するものである。

この後に、「詩人は間違えたら腹を切るくらいの覚悟が必要」と語るようになる。そのいわば皇国精神に基づく作品の例としては、次の句が相応しい。

天に代りて
死にに行く
わが名
橘周太かな

（「日本軍歌集」『前出』）

橘中佐は、日露戦争時の軍神。彼を賛美する「橘中佐」の歌詞は、「（略）霧立ちこむる高粱の／中なる塹壕声絶えて／目醒めがちなる敵兵の／肝おどろかす秋の風」である。

この歌を本歌取りし、重信自身の俳句への献身の心情を発露したのが次の句である。

目醒め
がちなる
わが盡忠は
俳句かな

（「前出」）

そして、評論活動においては、俳句への尽忠が内面に収斂するとともに批判精神として現れていく。

おわりに

重信は、晩年に「俳句形式は器でなく思想である」とした。戦前期からの日本と西欧の思想を身に着け、孤高な貴族的精神を纏う。重信は戦前期の精神を曳航する時代錯誤の船長ではない。

戦後の短詩型文学が成熟する過程において、その課題を体現する人物が登場する。その一人が重信であり、戦後のフロントランナーかつ最終ランナー。新たな俳句形式のもと疾走した。まさに、将星の存在であった。

しかし、新たな思想、俳句形式を顕在化するには、第三のスプリングボードが必要であった。最後には俳句形式に命をすり減らす。俳句との相対死とでもいうべき死であった。重信が親しんだ地霊・言霊がその永遠の船出を見送ってくれている。

おーいおーい命惜しめといふ山彦

（「山川蟬夫句集以後」『全集Ⅰ』）

注記

① 高柳重信「俳句の廃墟」『高柳重信全集Ⅲ』（以下『全集』と表記）立風書房　西暦一九八五年
② 高柳重信「『蕗子』の周辺」『全集Ⅲ』八五年
③ 高柳重信「わが心の恩師を語る　死ぬまで先生の名前を」『高柳重信散文集成第一六冊』（以下『集成』と表記）夢幻航海社　二〇〇二年
④ 高柳重信「『蕗子』の周辺」前出
⑤ 田中正俊『戦中戦後』名著刊行会　〇一年
⑥ 高柳重信「前衛派の諸論説について」『集成八冊』九九年
⑦ 高柳美知子「思い出すことなど」高柳蕗子ＨＰ（潮汐性母斑通信）より
⑧ 立花隆『天皇と東大』文藝春秋　一二年
⑨ 片山杜秀『皇国史観』文藝春秋　二〇年
⑩ 植村和秀『丸山眞男と平泉澄』柏書房　〇四年
⑪ 若井敏明『平泉澄』ミネルヴァ書房　〇四年
⑫ 田中卓編著『平泉澄博士全著作紹介』勉誠出版　〇四年
⑬ 立花隆「平泉史学と陸軍」前出
⑭ 高柳重信「『蕗子』の周辺」前出
⑮ 片山杜秀　前出
⑯ 高柳重信「略年譜」『高柳重信全句集』沖積舎　〇二年
⑰ 高柳重信「戦後俳句について」『俳句研究』一九七一年五月号『集成第一二冊』〇一年
⑱ 若井敏明　前出
⑲ 高柳重信「『蕗子』の周辺」前出
⑳ 植村和秀　前出
㉑ 高柳重信「神田秀夫戯論」『俳句研究』一九五五年八月『集成第四冊』九八年
㉒ 高柳重信「現代俳句の断層」『俳句研究』一九六〇年三月号『高柳重信対談・座談会集第一冊』（以下『座談会集』）夢幻航海社　〇三年
㉓ 高柳重信「俳句史の問題など」『俳句研究』一九七六年四月号『集成第一四冊』〇一年
㉔ 高柳重信「模糊たる来し方」『全集Ⅱ』八五年
㉕ 鮎川信夫『戦中手記』思想社　六五年
㉖ 色川大吉『ある昭和史』中公文庫　七五年
㉗ 吉本隆明『わが昭和史』ビジネス社　二〇年
㉘ 石原八束・高柳重信「現代俳句協会の来し方行くえ」『現代俳句一九七〇』『座談会集第四冊』〇四年
㉙ 高柳重信「敗北の詩」『全集Ⅲ』八五年
㉚ 加藤郁乎「皇道と俳道」『高柳重信読本』角川学芸出版社　〇九年
㉛ 高柳重信「俳句の廃墟」前出

「翌檜篇」(45)

東海地区青年部　編

青年部初めての吟行会　夏の桑名

松永みよこ

二〇二二年七月二日(土)、桑名市柿安シティホールで東海地区現代俳句協会青年部主催の句会が開かれました。

三重県桑名市は、東海道の宿場町として知られ、十返舎一九の『東海道五十三次』に「七里の渡し、浪ゆたかにして、来往の渡船難なく桑名につきたる悦びのあまり、めいぶつの焼蛤に酒くみかはして」と記されており、伊勢の国の東の玄関口とも呼ばれます。

桑名の吟行スポットから主なものを紹介しましょう。

①**七里の渡し跡**

揖斐川の河口に面し、かつて東海道唯一の海路の玄関口だったことを示す檜の大鳥居が建てられています。石灯籠や石垣も風情を感じさせます。

桑名は熱田(現在の名古屋市熱田)から七里(二七・五キロ)の距離であることから「七里の渡し」と呼ばれていました。大松に守られた鳥居は伊勢神宮の二十年に一度のご遷宮(常若)に合わせて建て替えられます。近くには、航海の監視として置かれた蟠龍檜(ばんりゅうやぐら)(寝ている龍をかたどった檜)が復元されています。

桑名より宮へ七里や天の川

正岡　子規

②**船津屋**

明治の作家泉鏡花の小説『歌行燈』の舞台となった旅館(小説では「湊屋」)です。江戸時代には本陣だった格式の高い料理旅館として知られています。船津屋で詠まれた鏡花の句に「**冬の月焼蛤の二階にて**」があります。

店の入口には、『歌行燈』の映画脚本執筆の取材旅行で船津屋に滞在した久保田万太郎による「**かはをそに火をぬすまれてあけやすき**」の句碑が見られます。

この句に登場する「かはをそ」(獺(かわうそ))は小説『歌行燈』に獺が出てくるのにちなんでいます。裏の船着き場辺りを散策した万太郎が、ここはいたずら者の獺がいそうな所だと想像を膨らませたのでしょう。

③**六華苑**

一九一三年(大正二年)本格ルネッサンス様式を基調とする洋館と国の名勝に指定された池泉回遊式庭園を持つ和風建築からなる和洋折衷の重要文化財です。桑名の実業家二代目諸戸清六の住まいとして建てられたものです。鹿鳴館を作ったイギリス人の建築家ジョサイア・コンドルが設計

しました。
華美というよりは、モダンで上品、細部に注意が払われた建物という印象です。現在では、映画やドラマのロケが数多く行なわれています。また和室での能楽や雅楽の練習会など市民の文化活動の場として活用されています。

昼からの句会は、三十五名が参加して行われました。投句及び選句、披講ののち、福林弘子部長が司会を務め、高得点句についての意見交換の時間となりました。
初めは、初対面の人同士の緊張した雰囲気がありましたが、俳句について語り合うことで、徐々に活気あふれる空間へと変わっていきました。当日の高得点句の中から三句を紹介します。

吊ればすぐ川風つかむ軒風鈴　　杉山　悦子

川の町桑名の川沿いにある漁師町では、軒を争うように洗濯物が干され、昔ながらの風情や生活感が感じられます。そこでみかけた風鈴を詠んだ句でしょうか。「吊ればすぐ川風つかむ」しなやかな風鈴と川風の清新さとが初夏の訪れる喜びをもたらします。

夏がすみ未来都市めく河口堰　　平賀　節代

桑名の川を歩くと目につくのが大規模な河口堰です。少し先にはナガシマスパーランドのジェットコースターや川越の電力館なども見えたりと、歴史ある町には、やや違和感があるような近代的な建物の一群を「未来都市めく」と捉えました。夏がすみのスモークがかかり、まるでドラマの始まりのようです。

炎天へ槍を立てたる武将かな　　ひらの浪子

九華公園入口の本多忠勝像を見て詠んだ句でしょう。炎天へ槍を立てる力強い所作が目に浮かびます。本多忠勝は、徳川四天王の一人、桑名藩初代藩主、槍の名手として知られています。
九華公園は桑名城址で、現在は桜や菖蒲の名所として親しまれています。
九華は「きゅうか」と呼びますが、九(く)華(はな)＝くはな(桑名)が由来となっています。
七月とはいえ、かなりの暑さだったことを投句の中に見られた「炎天」や「風死す」「日盛り」といった季語が伝えていました。暑い中、参加していただいた方々に感謝しています。
また今後、私たちと東海地区の青年部活動に参加して下さる方を募集しています。
今回のような景勝地吟行の他にも、ジャズ句会など楽しい企画を考えています。興味をお持ちの方はぜひご一報ください。青年部一同心よりお待ちしております。

青年部員の句

人待ちの金魚のヒレの青さかな　　菊山　千月
ていねいに光あつめぬ夏の川　　福林　弘子
白南風や大き鳥居の渡し跡　　村山　恭子
風死して我等はじめの一歩ゆく　　松永みよこ

ブックエリア

川名つぎお句集『焉』

発生にそって自在に…

前田　弘

川名つぎお句集『焉』は、『程』（平成四年）、『尋』（同十年）、『豈』（同二十六年）につづく、氏の第四句集になる。句集の帯文に「アジアの土地、財産、生命を席巻した日本の父ら沈黙のまま没した。山河を守った民の遺族、殊に遺児らの戦後も日本と同じゅうした。父の沈黙に降りてゆく」とある。

空襲下の東京で耳にした息を切っての敵機襲来のサイレンに怯えた幼少年期から令和の今日まで、直接・間接的に体感した戦争の記憶。『焉』に呼び起こされた俳句はどれも手強い。

敗走の父にタブーあり三猿
残像は父か卯波の沖明り
父の沈黙こそ負の文化だった
父ら非我と兵の間に行方不明

戦後七十五年を超えるが、戦場から帰還した兵士たちの口は意外に重く硬い。戦後の始末が遅々として捗らないのは父たちの沈黙にも起因するのかも知れない。

父らの残務われは未見の謝罪か
子らの世に原爆忌わたす神経
遺品の父は黒髪と軍隊手帳

等、身内ならではの叱責だろう。そして、この句集でぼくの心に突き刺さった戦場は、国民学校に疎開した千葉の地である。

弟と走った機銃掃射の緑野
青枯れし少年のままの「気をつけ」
疎開の靴・千葉は着物に下駄だった
下総やわらじに下駄にズック靴
強制疎開や捕虫網の行方

昭和十年生まれの作者は国民学校の生徒として学童疎開を体験している。昭和十四年生まれのぼくの学校生活は小学校からスタートする。この差は意外に深い。疎開地の千葉は作者に大きなカルチャーショックを与えたが、疎開地は国民学校の生徒にとっては戦場であったかも知れない。疎開した児童の眼を通して表現された疎開句は稀有である。

東京の蟬の爆死と歩むなり
戦後十年鳴かなかった蟬いずこ
日がな走る蟬の佃煮もてはやされて
利根・多摩・相模より蟬の都入り
暁闇の始まりを鳴くひぐらし

『焉』には蟬の句が十二ほど収録されている。季語というより作者と一体化した相棒かもしれない。強面の作者の意外な顔である。しかし、つぎおさんには蟬がよく似合う。

東京の蟬の爆死と歩むなり
陽炎に知る祖先の不安ユングの忌
ポケットを街のどこかに落しけり
雲雀野や予科練に学ぶ犠牲打
核実験ドストエフスキー流刑地
近代の手暗がり我の字の「戈」
ＤＮＡしらぬ遺族タラワの飢餓と
父ら非我と兵の間に行方不明
疎開地や電灯開き村祭り
遺る民族は頭脳のケロイド
忘却曲線かなたまで朧にて
銀河を眼に化石となったモノたち

著者の自選十二句である。作者の言語時空は広くて深い。読めば読むほど味が出る。熟読玩味して欲しい一書である。

（現代俳句協会）

◎北海道　中北海道・東北海道・南北海道・北北海道

豹柄のマフラーを巻き小買物　荒川　弘子
ぽつねんと在れば目の合う雪達磨　飯沼　風華
螺旋階段ゆっくりついてくる寒さ　石川美智子
十一月の夕暮ラップの端さがす　上田　敦子
呟けど距離縮まらず冬銀河　遠藤　静江
善人の貌して去りぬ寒鴉　岡本　順子
雲重き東湖鶴唳轟けり　桂井　俊子
年ごとに父の貌なり新走り　北原　白道
不確かな幸福論や冬薔薇　小飼　紫香
十二月八日補聴器に雑音　小林　ろば
柚風呂や母の格言祖母ゆづり　齋藤　厚子
遠巻きに湯舟の柚子や出れば寄る　齋藤　雅美
流氷離岸広辞苑を閉じてから　鹿岡真知子
ちゃんちゃんこ着て百歳に間がありぬ　鈴木　築峰
大樹雪に聳え百年の孤独　十河　宣洋
容赦無き重さに耐へて雪を掻く　谷　花丸
コロナ禍のやたらカナ文字まだら雪　寺田　保子
ロボットのきれきれダンス帰り花　長野　君代
枯野原遥か向かうをゆく鯨　中村みずほ
年の瀬の湯殿の水を荒使ひ　沼尻世江子
長らくの無沙汰忌日は牡丹雪　原田　昌克
すが漏りやドラえもんなら何とする　藤森そにあ
流されるぼろぼろの魚草氷る　古川かず江

第14回 現代俳句の風

あそび足り手袋雪だるまのやう　三国　眞澄
人想い人に想われ賀状書く　村川三津子
裸木は裸木なりの深青空あり　山中　昇
ひと包みの端切れは母の花野なり　吉田　洋子
待たされて少し大人になる枯野　脇本　文子

◎東　北　青森・岩手・秋田・宮城・山形・福島

白鳥の剝製を置き駅寒し　淺沼眞規子
軒つらら剣より強し記者のペン　阿保　子星
綿虫と渡り切つたる赤い橋　稲村　茂樹
他界へと想い馳せおり竜の玉　宇川　啓子
砂時計に草木なき山冬灯　大河原真青
耳掻きの頭に雪の積もりける　大類つとむ
人間を瓦礫と思ふ冬の月　春日　石疼
父性かな風を寝かせて枯葦原　加藤　昭子
あかあかと一息の詩や去年今年　岸部　吟遊
年忘れマンガッタンに乗り換えて　黒河内玉枝
凩は過疎のはずれで消えていた　小林万年青
年新た青葉山に発す放射光　小村　寿子
しぐるるや私を超えるのは私　櫻井　潤一
冬霧や人待ち顔の街路灯　佐竹　伸一
鎖のまま鼻上げる象冬青空　佐藤　みね
空のいろ緩んできたり浮寝鳥　庄子　紅子
人語にも句読点なきホワイトアウト　鈴木　栄司
仏灯の死角を生きて冬の蜘蛛　鈴木満喜子

星ひとつ消えて狐火殖やしけり　高橋　彩子
聞香は鼻に片手や一茶の忌　竹鼻瑠璃男
小春日や低き城山凜として　竪阿彌放心
森深くオアシス求め冬の蝶　蔦　とく子
終焉の日も在る筈の暦買う　東海林光代
パンの木に夜学の灯こぼれをり　中村　春
一合の飯炊く愚直寒卵　新渡戸信子
死化粧の妻の可愛や雪こんこん　野田青玲子
極月の簞笥に褪せてゆく国旗　平子　玲子
霜柱月を支えているばかり　細井　美人
雪藪（ゆきやぶ）を漕いで歩きぬ生きるため　南　美智子
凩や掃き残したる星の屑　宗像眞知子
雪はまだ腰の高さと里の姉　湯田　一秋
冬木々の黙は多くを語りおり　渡辺　竹女

◎東　京　都区・多摩

クリスマス真白き卓布広げをり　秋山ふみ子
翅閉ぢてつひのつつしみ凍蝶は　足立喜美子
こめかみの一閃くらき霜柱　有坂　花野
撃つごときコロナ検温冬に入る　飯田　史朗
寒すばる喉美しく伸びるなり　石井　府子
高架下のドリブル冬の影長く　石橋いろり
オリオンの数式を解く霜夜かな　磯部　薫子
ぼくたちは白紙委任で熊穴に　伊東　類
かりそめの凍蝶の色野に帰る　居林まさを

第14回　現代俳句の風

大往生の瀬戸内寂聴冬銀河　上田　桜
北行の列車は演歌雪はげし　大友　恭子
冬枯の生垣満たす記念樹よ　岡野　順子
雲を追う雲新年の彩鮮やか　金谷サダ子
みそっかすの少女がつぶす霜柱　川崎　果連
赤紐で括りし丑の年賀状　菊池ひろこ
微光得し微塵発光十二月　管山　宏子
武蔵野の冬晴れを吾が総身に　高坂　栄子
番号で呼ばるる仔牛冬すみれ　古寺ななえ
人の名を時々忘れ寒蜆　小林　則子
鉄瓶の白湯やわらかき榾火かな　酒井眞知子
パソコンの青い光に触れて咳　櫻木美保子
空つ風三代前は上州人　讃岐　幸江
聞き上手ゆっくり崩す蕪蒸　白石みずき
追ひかけて来て追ひ抜いて行く枯葉　鈴木　浮葉
断熱材的夫婦の冬日和　栖村　舞
小春日や箱椅子二つ老いの基地　髙島正比古
豊饒の海明け近し漁師鍋　高橋　和子
巌頭の鷹海洋に一直線　竹内　實昭
木枯の一夜の果ての吹き溜り　谷川　治
木守柿通勤準急加速せり　土屋　秀夫
山茶花の咲くに任せて民主主義　戸川　晟
シャコンヌの余韻ただよう姫始　永井　潮
寒星の放浪の椅子土砂まみれ　中原　空扇
♭（フラット）の激しき吐息雪女郎　南行ひかる

冬落暉しろがねのひかり妖麗と　西村　純太
今日という過去沈みゆく冬夕焼　抜山　裕子
曖昧なことはそのまま冬至の湯　蓮尾　碩才
雪しまく夫婦檜の不即不離　林　ひとみ
命ある時間をすする葛湯かな　平林　敬子
戦ひはまだはじまらぬ冬薔薇　藤田　由起
渡良瀬川のあばら骨出し水涸るる　松川　和子
着ぶくれて忘れられたような日々よ　三池　泉
つまづきて枯野へ母を飛ばしけり　三井　つう
葛湯吹く母には母という順路　宮崎　斗士
ガンマンのやうに手袋嵌めてみる　本杉　康寿
十二月八日動物園は要りません　山本こうし
三味線の弾初め響く祇園かな　豊　宣光

◎関　東

茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・神奈川

無頼派の匂いを余す帰り花　相田　勝子
夢を語ろう水源は大枯野　秋尾　敏
子ら迎へしばし母役雑煮盛る　秋元　倶子
ワイングラスに赤い時間の結氷す　阿久沢長道
滝凍てて新たなる魂生れけり　浅野　都
着ぶくれていつも変らぬ祈りごと　新井　洗澄
冬ぬくし粗忽長屋へ迷い込む　飯田ヒロ子
空っぽの箱転がして十二月　飯塚　幸子
宇宙へと旅する時代冬至風呂　井坂　あさ
しぐるるを狐日和と夫の言ふ　石井　紅楓

第14回 現代俳句の風

体内に迷宮のあり寒夕焼　石倉　夏生
喜寿の日やポインセチアの届く午後　板羽未知子
当て・術・運・熱なんにもなくて冬籠　井上　心生
ぶり大根あめ色になりバス停へ　伊与田すみ
部屋干しのシーツに映る聖樹の灯　植　朋子
冬北斗高圧線がからめ捕る　上田　久幸
数へ日の果てなく続く尾灯かな　内田　豊子
冬虹になってしまいぬ千羽鶴　宇津木玲華
この星の廻る音して夜冴ゆる　江原　文
ゆびきりの後マフラーをしてやりぬ　大川原弘樹
日向ぼこベンチに遊ぶ睡魔かな　大島　和
冬ざれや五箇山豆腐縄しばり　大塚　茂子
雪激し社員残らず帰り行く　大和田栄子
進めすすめしんがりのなき初詣　岡田　春人
鯛の眼が覗く魚屋福袋　岡村　行雄
寒柝や人みなやさしき三丁目　小川トシ子
明日こそは平らと思ふ寒夕焼　長田美恵子
枯芝に青年影を映したる　小沢コウジ
バヂルなど入れて七草粥とせり　尾堤　輝義
ほどけない紐の結び目冬入日　小野　裕文
極月やダリの描きし臍の裏　片山　蓉
手の平に今日散る紅葉今日の色　加藤　法子
先手打つ音やわらかに日脚伸ぶ　金子　嵩
冬ざれや無人の駅の小座布団　神谷　邦男
無季といふ空もありけり兜太の忌　川上　修一

大根炊く何だか歌いたい日ぐれ　川島由美子
狼のこゑ天籟となりにけり　川村　研治
さはさはとすだまの影か寒月光　川村智香子
青すぎてたいくつな空狐罠　北上　正枝
独楽二つ納屋より昭和転げでる　北田　久雄
くさめして我に戻りし山頭火　北村　文江
一葉忌歩けば爪先が窮屈　桐山　茅ぐ
冬の日の手にあまりある孤独かな　久保田桂子
水涸れて見えない敵を許す石　栗山　和子
小春日や駝鳥飛ぶこと忘れおり　小池　弥生
寒月光ミロのヴィーナス金縛り　幸田慶三郎
根上がりの松の力よ冬青空　小駒さち子
邂逅の糸たぐりよせ冬銀河　小杉栄美子
戦争の合間を生きてレノンの忌　小林多恵子
板長が絵皿に咲かす海豚の花　五明　昇
風花の散華ホームに山男　彩斗　十明
寒空を一つに括る空師かな　齋藤　稔
世話せずもいつものように石蕗の花　桜庭　義昭
いつの間に一組なりし干蒲団　佐藤　愛子
詩を詠んで余生楽しむ木の葉髪　佐藤　七重
鍛へむと風に真向ひ落葉掻く　佐藤　浩子
見てゐたる海の中より冬の虹　澤浦　和美
埋火やつひに書きたるラブレター　塩谷きみこ
あれは何処さっき話した日向ぼこ　柴崎　光昭
真夜中の木枯し涙流れきぬ　清水　克郎

第14回 現代俳句の風

寒林におどけし幹の物語　白井しげみ
魁は寒紅梅の忍びの香　菅沼とき子
過ぎし日へ旅に出掛けむ縁小春　菅原　仲江
電球の丸み勤労感謝の日　杉山あけみ
見事なる窯変まるで冬銀河　鈴木　千鶴
春近し石に顔ある野面積　鈴木まんぼう
ブロッコリに青虫年を越すつもり　須藤　正之
梟のこゑの点滅自粛せよ　関根　洋子
枯葉道ひとまず今日を踏んでゆく　髙木　暢夫
放射線科だれもが鶴を抱くように　髙橋　公子
会へぬ日を重ねざらつく冬日差　髙橋　健文
冬どなり術後は水と帰還せり　高橋　亨
元朝や加齢俳句と生さぬ仲　田口　鷹生
浮寝鳥しばし五感を休めおり　伊達　甲女
もういない人の話をして熱燗　田中　朋子
レノンの忌般若心経唱へけり　田端　重彦
走り出す図鑑の恐竜開戦日　たむら　葉
ムンクの眼外は雲たれ室の花　土屋佐奈江
いつまでも故郷身につけ山眠る　寺内　若子
去年は仮名今年蘭亭書初す　戸辺喜美江
腹立ちもこの世での些事冬青空　中井　洋子
和菓子屋のピンクの幟春めけり　長澤　健次
親に身をひくナースの暮し寒の内　中島　俊二
埋火や見えない過去も掻き回す　中根登美子
揉み手して津軽言葉の焼芋屋　中村　國司

冬薔薇息ととのえてベルを押す　中山　妙子
ふるさとの暮色編み込む毛糸玉　波切　虹洋
寒雀一列日の出ひた待てる　西野　洋司
裸木の未練すぱっと明日を待つ　根本きよ志
富士山の大きく育つ霜の朝　野本　史子
年の暮親子手合わす祖の墓　袴塚　竜子
自粛とは蠟梅の香のとどく距離　長谷川ヱミ
口上は上州訛りの寒四郎　長谷川　進
冬うらら江の島帰りのカルパッチョ　濱口たかし
墓地なれば無縁にも声かける暮れ　早坂　澄子
モコモコのセーターフワフワの記憶力　原　博子
疎疎として咲き始めたり寒椿　菱木　良一
漱石の気持で詩よむサザンカや　福島　芳子
無口なる叫び流氷到来　藤澤　晴美
青年の顔に戻りて望粥吹く　寶子山京子
飛行機の雲を突き抜け神の旅　細井　寿男
帰国青年茶道はじめて赤のまんま　堀　秀子
生きもののやうなる言葉初暦　本田　康子
せせらぎの風に寄り添ふ冬紅葉　牧野　英子
小雪の母の命日汁粉煮る　増田　豊子
世に格差地球に時間差寒椿　町野　敦子
セロファンに包まれている聖夜かな　松村　五月
雪嘆きつつこの里を捨てきれぬ　馬渕　津枝
大小の手跡足跡雪達磨　三須　民恵
先づ妻よ我は二番に冬至風呂　水野　鶯遷

第14回 現代俳句の風

懸命な適当もある軒つらら　宮澤　順子
籠もる夜に聴く凍蝶の吐息かな　宮本美津江
妻の愛御飯も重ね海苔弁当　村上　裕也
短日や待合室に微熱の子　本橋　稀香
腑に落ちるとは木枯しの蒼さかな　茂里　美絵
凩や病室にない鍵の穴　安井　三緒
対向車無き風垣の沿岸路　矢吹えり子
万華鏡まわせば宇宙星凍つや　山口　壽子
十二月八日正三角に握る飯　山田ひかる
狐火や髪の白さの止めなく　山根　延子
開戦日今も師走の中にある　湯本　直也
風音のきゆるきゆる尖り寒の入　横田真智子
会ってすぐ綿虫を見たという手話　吉田　典子
脱藩のごとき骨壺風花す　若林　常雄
知らんかつた十二月八日の捕虜一号　渡辺　正剛

◎甲信越　山梨・長野・新潟

新雪それ程でなくて昭和近くて　有栖川蘭子
山の音けちらし消ゆる狐かな　伊藤　美恵
春遠からじ薬ごと輪ゴム止め　上原　富子
病む人の快癒を託す新暦　小熊千恵子
聴初やまよはずアルト・ラプソディ　小伊藤美保子
蓮の骨折れて地獄の風渡る　塩澤やとし
雪しまく墓標を持たぬ鳥獣　袖山　リヱ
図書室は活字の森よ薪ストーブ　中澤　康人

空白かまたは余白か斑雪　西澤日出樹
俎板に数多の音や開戦日　長谷川みきこ
霏々と雪大地の疵を癒すべく　本多　独川
寒晒しつくづく昭和の遠くなり　宮坂　秋湖
いつの世の烏帽子の箱や嫁が君　吉池　史江
雪掻きや春来る道を拡げをり　吉松　宣子

◎北　陸　富山・石川・福井

未完の完あるや紅葉散り急ぐ　浅田　正文
数えなくても白鳥の抱き心地　梅木　俊平
鮟鱇を寝かす北國新聞紙　大沢　輝一
初富士を臨む機上の新世紀　加藤　雅子
決めかねる助詞に霙の降り出しぬ　河岸　佳子
吊されしコートに肘の曲り癖　後藤みち子
近寄るを待って飛び立つ冬の鳥　坂田　直彦
我が村に片足置いて冬の虹　白﨑寿美子
雪を踏む墓のまわりの土を踏む　関戸美智子
外階段雪の日暮れはホ短調　舘　百合子
戸を叩く風睦まじき蕪蒸　中内　亮玄
ひとり言大きくなって冬めく日　中山　慶子
雪原を突つ切る河の黒光り　野田悠美子
吹雪く夜は耳を尖らせ眠るかな　平野もとみ
耳遠くなる着ぶくれて世事疎くなる　二口わこう
干菜漬け作りすぎるという平和　前川　康子
着ぶくれて善人顔を装ひぬ　村木ノブヒロ

第14回 現代俳句の風

俳句には百点などなし年暮るる　八尾とおる
黒き雲霰従へ龍のごと　山本　正子
枯蟷螂あとどれくらい鎌振るか　吉本　敏子

◎東　海　静岡・愛知・岐阜・三重

会いに行く小春日和の犀の尻　浅生圭佑子
散紅葉その一瞬の声を聞く　石川美智子
蜜蠟の灯の揺るぎなき冬の宮　伊藤壽美子
寒九の水胸のささくれ流さんと　犬飼　孝昌
口げんか長く続かぬ葛湯吹く　岩井　君代
湯冷めして吐息の後は闇を吐く　植田　密
逡巡の春まだ遠き子の机　鵜飼　惠子
冬麗のひかり纏いて残夢あり　大石　恒夫
頬杖はつかない神戸震災忌　大西　健司
住み馴れし道を迷ひて探梅行　岡本　千尋
空席に冬日の座る電車かな　風岡　俊子
寒椿ここより先は崖つぷち　角野　弘子
退屈な空が時雨を降らせをる　加納　寿一
薬だけもらふ窓口クリスマス　菊本としこ
寒さ急折り皺つきし服を着て　北岡千恵子
赴任地へ三度乗りかへ雪明り　鬼頭　義和
初雪やカナリア色の傘ひらく　小林久美子
様様な葉擦れの音や冬深む　桜本　純子
冬ざるるただの噂と思ひしに　清水登美子
悴むやマーカーペンの光る線　髙松　正明

一条の希望の光冬の虹　田中　惠子
もしかしてファクターXは雪虫　田中の小径
後姿のだんだん小さく冬帽子　寺田　豊
雪女を待たせてあると気障な奴　豊田　正博
子の墓は浦を一望丘小春　西根みえ子
寒釣の等間隔の無口かな　野口　清美
寒弾や譜面離さぬ目の動き　浜西　修
口移しに仏名移し母の影　阪野　基道
蒟蒻も味噌も自家製猪の鍋　平賀　節代
傷痕の蒼き疼きや虎落笛　福林　弘子
朽野に佇む漢みちしるべ　前野　砥水
冬紅葉電話番号そのままに　松下　允子
木枯の吠えずにをれぬ身の置き場　水野　巨海
子の声としやぼん玉飛ぶ冬日和　宮田登世恵
銃声に天を仰げば山眠る　村松　二本
初氷さわらぬままに割れており　森田　高司
コロナ禍に耐へ大寒の団子虫　山内　丈
口の形に捨てられマスク冴え返る　山田和歌子
枯蔦と女からみあふ小径　与語　孝子
「ひとり」という冬景色になってしまおう　渡邊　弘美

◎関　西

滋賀・京都・大阪・兵庫
奈良・和歌山

湯の町へトンネル幾つ山眠る　芦田伊津子
山茶花や久しき甥の口答え　池田　奈加
パイロンや警備夫の笛寒日和　居原田連星

第14回 現代俳句の風

掲示板の画鋲さびたる寒雀　上田千恵子
冴ゆる夜や老犬餌を食べ残す　太田　省三
さあ何から話そうみかん転ばす　大宮　正暎
毛糸編むほつこりとある日差しかな　小川　桂子
ユーチューブに夢中の時空寒の夜　尾﨑加世子
冬の夜ペットショップに眠る犬　梶沼　和子
紅葉散る瀬戸内寂聴九十九　金澤ひろあき
非常用梯子備へし初電車　川崎かずえ
青貝の鈍く光れる鶴の息　岸本　由香
引けばまた更に遠のく毛糸玉　北村　峰月
ピアノ閉づ埋火をするやうに　熊代　保子
日の当たるここが故郷みかん山　合田マサル
石舞台の昏き狭間へ雪蛍　古梅　敏彦
一月の笑っていないピエロの目　近藤詩寿代
冬木の芽魂の吹き出す息づかい　櫻井　久子
小春日やカステラの底のザラメ糖　佐藤　俊
切られ役も所作は華麗に義士祭り　塩野　正春
鯛のタイかざして見せる木の葉　清水　瑛子
冬のメダカ成層圏のごと静か　翠　雲母
瓦礫より赤い毛布を掴み出す　曾根　毅
一人立つ大河の岸辺冬夕焼　髙橋　保博
蕗の薹ノスタルジーはほろ苦き　田中　和子
月冴ゆる地球の影を宿しつつ　谷口　佳代
キルト着る犬の尾つぽや朝の雪　辻井こうめ
銭湯にどつかと浸かる神の留守　津田　純一

焼芋を割って二つの夜が更ける　徳弘　喜子
愛日のつなぐ十二の物語　外山　安龍
調律のあとのブキウギ小春の日　中澤　矩子
人嫌ふ眼をしてゐたる枯蟷螂　中村　遥
雪吊やサイン・コサインまだ解けぬ　西久保弘道
鮟袖に鴨の一団陣を組む　野田　清月
久女忌や母は教師の父に添ひ　濱口　宏子
枯葉舞う駅前広場人まばら　原田　和子
マスクして目の饒舌になりにけり　廣畑　昌子
外灯の真下の闇や十二月　星川　淳代
いちにちの命の重み冬椿　松浦てつ子
棘となる光の飛礫クリスマス　南　悦子
八丁味噌とろけてうまし大根かな　椋本　望生
夕日影花柊のにほひけり　森　節子
初夢は取留めもなし今の我　森重　満
着ぶくれて九十もまだ通過点　八木　健夫
杖よりも先に顔ゆく小春かな　山崎しんぺい
プリズムの七色生まれ春着の子　山近由起子
開戦日服着せられしマルチーズ　夢乃　彩音
福笹や小判は肩に重くあり　吉川　千丘
鮟鱇鍋たえず昭和という分母　若森　京子

◎中　国　鳥取・島根・岡山・広島・山口

鯖缶を開く十二月八日かな　天野　光暉
時雨るるや待合室は二人きり　石川　芳己

第14回 現代俳句の風

かんがへて考へて蘆枯れゆけり　伊藤　舜
ここだけの話が走る節季かな　上重　石峰
自分史にうっすら舞っている小雪　岡　みずき
くしゃみする度に縮まる老年期　甲　康子
命の火継ぎ足している薬食い　川崎千鶴子
遺言書の筆跡鑑定冬の鵙　木村ゆきこ
天空の武家屋敷跡冬の鵙　國富　節子
神の留守つつうらうらの窓磨く　齊藤　信枝
来客の無き日が途切れ小春凪　新谷　雄彦
遮断機の音の荒ぶる冬の暮　滝本　勤
大太鼓眠れる山へ谺する　橘　美泉
まほろばの湖を器に冬銀河　月森　遊子
娘を送る夜の空港や音寒し　中野　澄子
着ぶくれて紙の鍬振る童話劇　筈谷　美保
冬の浜虹よりぬっと釣師かな　原　あざみ
どことなく父似のモアイ像小春　藤井八重子
早梅や日当りの良き島の墓　堀口　孝子
二杯目のコーヒーを注ぐ冬日和　松島美佐子
埋もれ火を熾り火にせよ開戦日　三村　榮一
透明であらねばならぬ大根洗う　村上　舞香
極月の卵の輝が迷走す　山縣　愁平

◎四　国　徳島・香川・愛媛・高知

マスクして身振り手振りで語りたる　安芸　紀子
饒舌の毒舌となるおでん酒　稲井　夏炉

三歳児の手のぬくもりや小六月　宇川　清英
巣ごもりはうたた寝ばかり冬の凪　大西　宣子
風待ちの港の明かり雪催　小木曽富美子
冬の虹消えゆくなぜかほっとする　上窪　青樹
空海の発心の道蓮枯るる　日下　静代
住む人の決まらぬ庭の返り花　杉崎佳奈代
しなやかにストッキングの裂け聖夜　高橋美弥子
荒荒しき言葉忘ずる落葉径　奈賀　和子
底冷えの無色透明なる硬さ　西木　恵子
クリスマスどこかで誰か泣いてゐる　野本　京
襟立ててやがて冬日を見失う　藤田　敦子
たむろして煙草　夢ひきよせて冬　古田　彩香
歳末や地方ことばの店並ぶ　宮田　頼行
遠き日を解けばセーター紐になる　三好　靖子
耐えること思い知らされ枇杷の花　山﨑タツ子
白檀の香を聞く黙や白障子　若葉　淳

◎九　州　福岡・長崎・佐賀・熊本・大分・宮崎　鹿児島・沖縄

黄落の最終章の歓喜かな　愛甲　敬子
年果つる亡母に告げたきこと多く　天川　悦子
冬ざるるアウシュビッツの「死者のメモ」　一瀬　祥子
柚子湯かな年寄りは年寄りが嫌い　宇田　蓋男
室の花寄り添うための防護服　江良　修
身のほどの贅沢をして開戦忌　小倉　斑女
パティシエの決戦はパリ聖夜くる　川辺やよい

第14回　現代俳句の風

晩秋の種火が墜ちて夕紅葉　桑鶴　翔作
托鉢の中にも霰や山頭火　河野　泉
銀芒もくろみ廻る白狐　下原　培子
牡蠣すゝる指の先まで日本海　谷川　彰啓
太陽へ手を振る冬の隙間より　土田　利子
褞袍着て収骨の野に五十年　渡嘉敷皓駄
天球の視座に転がる寒の月　中島　芳昭
コロナの禍なれど大根よく太る　中村　和男
寒昴父の陰嚢に敬礼す　橋口　等
南京櫨の色付きにハヤブサ2帰る　福富　健男
蔦枯れてビル一面の線描画　堀口　良子
祖父のつぐ泡盛りの音冬至かな　真喜志康陽
冬ざれやじわり軽石魚影なく　宮里　晄
マスクして噂話しの中に居る　村田　規子
石鹸の泡立ちのよき冬至の夜　山際はるか
梵字より湧き出してゐる雪螢　山本　則男

◎外　国　アメリカ合衆国・ドイツ

レノン忌のあまたの石が脈を打つ　ナカムラ薫
シュガーレスココアとスピノザで籠りぬ　氷口　恵
はるかなる辺野古の冬よジュゴンらよ　平林　柳下

青山　酔鳴

感銘の一句

脱藩のごとき骨壺風花す　　若林　常雄

勢いと丁寧さを共に感じた。骨壺の直喩として「脱藩」と詠んだ句をわたしは他に知らないが、この語の視覚的・口誦的強さは、故人が五濁の世からやっとのことで解放されたのではと思わせる。ひとしきりそのドラマを思い描いたあとを「風花」という季語が儚くもしっかりと受け、また骨・灰・壺の白さにパズルのピースが調っている。

感銘十句抄

遠巻きに湯舟の柚子や出れば寄る　　齋藤　雅美
枯野原遥か向かうをゆく鯨　　中村みずほ
寒すばる喉美しく伸びるなり　　石井　府子
狼のこゑ天籟となりにけり　　川村　研治
春近し石に顔ある野面積　　鈴木まんぼう
鮟鱇を寝かす北國新聞紙　　大沢　輝一
耳遠くなる着ぶくれて世事疎くなる　　二口わこう
冴ゆる夜や老犬餌を食べ残す　　太田　省三
引けばまた更に遠のく毛糸玉　　北村　峰月
冬のメダカ成層圏のごと静か　　翠　雲母

石原　玲子

感銘の一句

寒すばる喉美しく伸びるなり　　石井　府子

中七の喉美しくと表現することで、視点を寒すばるではなく、喉の方へ移されています。なかなか思い付かない言葉です。上五の寒すばるは冬の夜空のぴんと張り詰めた空気感を思わせます。喉美しという言葉によって、作者の心情を表し、もう一度この句に隠されている寒すばるの美しさを読み手に感じさせてくれます。

感銘十句抄

仏灯の死角を生きて冬の蜘蛛　　鈴木満喜子
空つ風三代前は上州人　　讃岐　幸江
ワイングラスに赤い時間の結氷す　　阿久沢長道
しぐるるを狐日和と夫の言ふ　　石井　紅楓
体内に迷宮のあり寒夕焼　　石倉　夏生
凩や病室にない鍵の穴　　安井　三緒
雪しまく墓標を持たぬ鳥獣　　袖山　リヱ
初雪やカナリア色の傘ひらく　　小林久美子
着ぶくれて九十もまだ通過点　　八木　健夫
黄落の最終章の歓喜かな　　愛甲　敬子

感銘の一句

極月の簞笥に褪せてゆく国旗　平子　玲子

三軒鼻　恭

戦後間もなくの小中学生時代には、国旗掲揚と国歌斉唱の記憶があるが、今は入学式と卒業式に見られる程度。家でも祝日に国旗を掲げていたが全くしない。国旗が身近に見られるのはスポーツの国際試合くらい。健全な国家観も家庭での話合いが重要。簞笥の国旗が色褪せるのも頷ける。

感銘十句抄

着ぶくれていつも変らぬ祈りごと　新井　洗澄
手の平に今日散る紅葉今日の色　加藤　法子
独楽二つ納屋より昭和転げでる　北田　久雄
埋火や見えない過去も掻き回す　中根登美子
凩や病室にない鍵の穴　安井　三緒
口げんか長く続かぬ葛湯吹く　岩井　君代
さあ何から話そうみかん転ばす　大宮　正暎
着ぶくれて九十もまだ通過点　八木　健夫
鮟鱇鍋たえず昭和という分母　若森　京子
黄落の最終章の歓喜かな　愛甲　敬子

感銘の一句

体内に迷宮のあり寒夕焼　石倉　夏生

長井　寛

出口がわからないように作られた宮殿が迷宮である。『解体新書』は日本最初の西洋解剖書の訳本、以来書の教えの通り迷宮のような五臓六腑が解明されてきた。その五臓六腑は「心の中」を表わす。体内の迷宮と雄大な宇宙の寒夕焼とを取合わせると互いに響き合い、諧味たっぷりに昇華した一句となった。

感銘十句抄

軒つらら剣より強し記者のペン　阿保　子星
豊饒の海明け近し漁師鍋　高橋　和子
この星の廻る音して夜冴ゆる　江原　文
手の平に今日散る紅葉今日の色　加藤　法子
放射線科だれもが鶴を抱くように　髙橋　公子
世に格差地球に時間差寒椿　町野　敦子
腑に落ちるとは木枯しの蒼さかな　茂里　美絵
戸を叩く風睦まじき蕪蒸　中内　亮玄
鮟鱇鍋たえず昭和という分母　若森　京子
太陽へ手を振る冬の隙間より　土田　利子

中島修之輔

感銘の一句

世に格差地球に時間差寒椿　町野　敦子

上五の「世に格差」は社会性俳句の趣があり、中七の「地球に時間差」は物理的現象を表現している。それに対し下五の季語「寒椿」は咲き満ちてから、ぽたっと落ちるまでの時間差がそれらとは違う詩的な距離感であることを言い留めている。更に句全体が五七五定型の心地よいリズムに乗っており、誠に楽しい句になっている。

感銘十句抄

今日という過去沈みゆく冬夕焼　抜山　裕子
無頼派の匂いを余す帰り花　相田　勝子
冬北斗高圧線がからめ捕る　上田　久幸
腹立ちもこの世での些事冬青空　中井　洋子
寒雀一列日の出ひた待てる　西野　洋司
我が村に片足置いて冬の虹　白﨑寿美子
俳句には百点などなし年暮るる　八尾とおる
散紅葉その一瞬の声を聞く　石川美智子
寒釣の等間隔の無口かな　野口　清美
マスクして目の饒舌になりにけり　廣畑　昌子

圓山二幸子

感銘の一句

微光得し微塵発光十二月　管山　宏子

微かな陽射しの中に偶然塵が光にこぼれて、プリズムを生んだ瞬間。綺麗。誰もが見過ごす瞬きに、宇宙を浮遊して自然の妙をまったり眺め、夢心地と言う椅子に身を置いて、未来に夢を膨らませる。そして微光発光と言う化学的変化をあぶり出し、最後に十二月と言う季語でしめた。十二月の季語が効いている。讃美。

感銘十句抄

容赦無き重さに耐へて雪を掻く　谷　花丸
軒つらら剣より強し記者のペン　阿保　子星
仏灯の死角を生きて冬の蜘蛛　鈴木満喜子
体内に迷宮のあり寒夕焼　石倉　夏生
板長が絵皿に咲かす海豚の花　五明　昇
空席に冬日の座る電車かな　風岡　俊子
日の当たるここが故郷みかん山　合田マサル
着ぶくれて九十もまだ通過点　八木　健夫
黄落の最終章の歓喜かな　愛甲　敬子
托鉢の中にも霰や山頭火　河野　泉

図書館俳句ポスト

十月投句結果　題「柿」

選者―太田うさぎ・寺澤一雄・渡邉樹音

特選

入間市立図書館西武分館

名ばかりの富士見坂なり柿落葉　**笹間明明**

「富士見坂」からは富士山が見えていた。今は柿落葉が散り敷かれただの坂。

徳島市立図書館

柿日和二段ベッドを分解す　**山田絵里**

柿が実るころの晴天の日に子供の二段ベッドを分解した。子の成長を柿日和が祝福。

長崎市立図書館

柿貰ふ好きでは無いと言ひきれず　**上戸真弓**

柿を貰ったが、好きではないので要らないが断れない。日常のよくある一コマ。

函館市中央図書館

佳作　観覧車を吸い込んでゆく星月夜　安富明路

鍬の刃の鋼鳴りけり秋の暮　安福巌

晩秋のブリキのおもちゃバネの錆　中西芳之

迷ひなく布を裁つ音秋澄みぬ　村田鈴音

入選　菊花展札に品種の書き直し　小野寺礼子

マサラチャイ濃いめに淹れる秋の夜　銀子

縄文の風渡りけり鰯雲　松浦学

鮭届く姉の手捌き目に浮かぶ　吉田みね子

晩秋や栞にせむと葉を選ぶ　菊地利春

能代市立能代図書館

佳作　対岸の柿の坂道上るバス　源宙

入選　継ぎ合はす昔語りや後の月　浅田英夫

まだ食えぬ柿に鳥くる電話くる　古川よしみ

柿漬けの樽を確かめ脚立出す　向田久美子

水戸市立見和図書館

入選　ドレミファと音符並べる吊し柿　星見ひろ子

真岡市立図書館

佳作　秋深し猫も私も丸くなる　宮本恵美

一村に学舎ひとつ柿の秋　下和田真知子

入選　実る柿見上げ四方山話かな　小川充

さいたま市立大宮図書館

佳作　引き波の描く砂紋や暮の秋　竹内白熊

秋天に伸びるクレーンの赤と白　新菜

煩悩も生きる力や秋遍路　増田信雄

柿の家フォトフレームはみな硝子　宮澤順子

入選　柿届く包む新聞三日前　大橋朋子

行く秋や山の天気の晴マーク　木村るみ子

柿ポトリ前行く人を振り向かす　的場睦子

入間市立図書館金子分館

入選　親指は二倍動いて毛糸編む　砂狐

シャーロキアン集まり秋の夜はふける　大野美波

入選　図書館の本に付箋や秋の夜　内藤正人

秋晴れの空引き裂きて軍用機　松田千代

新座市福祉の里図書館

佳作　豚カツに辛子たっぷり天高し　小林宏子

入選　関節や甘柿食うて動きよし　安田友久

柿剝けば柿色螺旋ゆらゆらと　柴崎光生

久喜市立菖蒲図書館

入選　英検の1級合格柿日和　引地睦美

桶川市立中央図書館

佳作　タグ付きの服を纏へる捨案山子

入選　醍醐寺の相輪に飛ぶ鰯雲　渡辺七枝
　　木村隆夫

桶川市立桶川図書館

入選　柿挟む先割れ棹の軽さかな　野原虎ヶ岡

江東区立東大島図書館

入選　山栗を拾って来しは次男坊　茂木とみお

江東区立東陽図書館

入選　空見上げ大きく雲の動く秋　上野美子

豊島区立目白図書館

入選　身に入むや柱に残る筆の跡　宇都宮隆文
　　仏壇のかすかに傾ぐ熟柿かな　小田栄一
　　町会の終わってひとつもらう柿　古山冬日
　　ミサイルの警報解除柿を剝き　蓮尾碩才

豊島区立池袋図書館

佳作　首里城の謎解きラリー秋うらら　長山椿

江戸川区立葛西図書館

佳作　古井戸へ五阡円札落つ一葉忌　中村隆雄

江戸川区立篠崎図書館

入選　太極拳桜もみぢを踏みながら　秋元六夫

立川市錦図書館

入選　吊し柿会津の母は心配性　シマトネリ子
　　赤子泣く家の前掃く文化の日　堀江孝晴

立川市高松図書館

佳作　濃き色に信号交換秋日和　山野草

入選　柿とりて梯子そのまま雨の中　佐藤幸子
　　見上げれば十階辺り吊し柿　松谷栄喜
　　絡みあふチェロとピアノや柿紅葉　井澤勝代
　　秋日和公園巡る車椅子　奥村和子

寒川総合図書館

入選　夕空と熟柿照れ合ひ照らし合ひ　加藤西葱
　　神送夕日が海に路つくる　吉田半夏生

燕市立図書館

佳作　鬼のまま帰る「影踏み」秋の夕　高橋きらら

入選　三日月や車を停めてアイス喰ふ　奥山智女

浜松市立中央図書館駅前分室

入選　恋文の投函へゆく神渡し　尾内以太

浜松市立三ヶ日図書館

入選　冷蔵庫にうんだらべえの富有柿　中嶋克明

高山市図書館煥章館

入選　ゴミ出しの当番決める柿博打　卯筒

高山市図書館一之宮分館

入選　露天風呂お国言葉に柿日和　松尾基子

大阪狭山市立図書館

入選　次郎柿持たす回覧板の子に　春陽

東広島市立中央図書館

入選　子の名前忘れし父や柿熟るる　金蓮花
　　敬老日脳トレ筋トレ舌をベェー　村上惠子

徳島市立図書館

佳作　雑草を遠く刈る音の秋の昼　清水祥司

入選　コンビニのトイレより魔女ハロウィーン　山口久雄
　　母恋しきれいにむけた桃一つ　尤翠
　　録音の雅楽流して秋祭　高須賀文子

長崎市立図書館

入選　母に似てるというこの手柿をむく　牧多津江
　　絵手紙の彩り楽し柿紅葉　出島蘭
　　子規さんの食べたは丸柿トンゴ柿　池辺ふみ
　　ベランダに洗濯物と干柿と　小原達朗

日田市立淡窓図書館

佳作　仕立屋は五人の子持ち柿熟るる　一瀬祥子

豊後高田市立図書館

佳作　長く長く祖母は柿剝く名人で　高橋和美

入選　病欠の部下の机に柿二つ　水取次郎

新入会員記念作品

狼の足音迅し冬木立　村山　温子　岐阜
花冠上げぐいと立ちたる冬の薔薇
もう知つてゐる六月の長い紐　瀧澤　航一　群馬
ショスタコーヴィチ膝を屈せぬゆゑ斑雪
綴ぢながら光の束なる銀花かな　水越　晴子　三重
冬景や赤き列車の一流れ
かまつかや海は谺を返さずに　高木　宇大　埼玉
竹籠に軍鶏の目のある葛の花
青北風やスカート丈を長くして　高橋　千典　三重
行列に並びて愛づる今日の月
頬杖の会話氷菓は溶けてをり　早川　厚　東京
闇にあり地吹雪鳴らすモンブラン
背泳ぎは私の時間無為無策　見目　千絵　東京
渡り鳥朱に交われば遠ざかる
向日葵と束ねる仏花海の唄　中西　芳之　北海道
足長き蜘蛛天泣に濡れてゆく
薄塩のポテトチップス盆の月　眞砂　子　神奈川
産科医の産休中や明け易し
介護車に傘差し掛ける菜種梅雨　長島　廣忠　千葉
万緑や写経を終えて深呼吸
正論を聞きつつ崩す冷奴　阿波　秀子　和歌山
石段に津波跡あり七五三

到着順

新刊案内

事務局

（二〇二一年十一月二十一日整理分まで。但し、現代俳句協会会員のみ。記載漏れ等がありましたら事務局までご連絡ください）

句集

『青草』
福井在住「海原」　佐孝石画
俳句同人誌「狼」

『薔薇は薔薇』安藤喜久女
兵庫在住「俳星会」文學の森

『鈴木しづ子一〇〇句』
武馬久仁裕
岐阜在住　黎明書房

『遅日光』　玉井淳子
愛媛在住「暁」「新風」　不二印刷

『柔らかなうちに』
山崎妙子
神奈川在住「岳」　岳書館

『宙のいろ』　三好靖子
愛媛在住「新風」　不二印刷

『青蘆』　原田要三
群馬在住「秋」現代俳句協会

『砂時計』　横田明美
奈良在住「幻」　幻俳句会

『自句自解Ⅱ』　秋尾　敏
千葉在住「軸」日本ハイコム

『はだかむし』　恩田侑布子
静岡在住「樸」
角川文化振興財団

評論

『俳句空間の言語』
後藤　章
埼玉在住「自鳴鐘」
現代俳句協会

『明日への接手』西池冬扇
徳島在住「ひまわり」
ウェップ

『三橋鷹女の一〇〇句を読む』
川名　大
神奈川在住　飯塚書店

エッセイ

『愛犬チョコが見守っている』
三木星童
大阪在住「風羅」　邦文社

●逝去謹悼●

窪田タカノ　愛媛　R4・9
小林　明適　静岡　R4・8
横須賀洋子　千葉　R4・10
佐藤　貫一　三重　R4・10
一志貴美子　長野　R4・11

◇訂　正◇

左記のとおり訂正してお詫びします。

『現代俳句年鑑23』

69頁　植垣規雄　結社　海原→無
102頁　川邉満江→河邉満江
124頁　斉藤すみれ　結社　実の会→岳
146頁　正　初詣二の鳥居よりマスクして
誤　初詣この鳥居よりマスクして
147頁　正　もぐり込む蒲団は夢の穴なりき
誤　むぐり込む蒲団は夢の穴なりき
207頁　正　幼霊の零せしものか露ひとつ
誤　幼霊の零ししものか露ひとつ
226頁　正　旧盆や本も開かずペン持たず
誤　旧盆や本も開かずペン持たず
291頁　主催　村松二本→主宰　村松二本
302頁　名誉代表　清水　伶→名誉代表　塩野谷　仁
代表　塩野谷　仁→代表　清水　伶

・『現代俳句』電子版購読のご案内は最終頁に掲載しています。

○編集室より――○

新年明けましておめでとうございます。

本年もよろしくお願い申し上げます。

○今年の干支は卯、卯は幸運を呼び、知恵や行動力、飛躍を象徴する動物です。

日の入りをみている陸の白兎　宇多喜代子
春浅し白兎地をとぶ夢の中　飯田龍太

「兎と亀」や「因幡の白兎」は子供の頃より親しんできた童話です。大国主神と因幡の白兎の石像が鳥取県の白兎海岸に立っています。

仏教用語の「亀毛兎角」は亀に毛が、兎に角がないことから現実にはあり得ないことの喩えに用いられます。漱石の『草枕』の「智に働けば角が立つ　情に棹させば流される　意地を通せば窮屈だ　兎角にこの世は住みにくい」の冒頭文は俳句の心髄にも触れる思いがします。こちらの「兎角に」は南朝時代に存在した梁で編纂された『述異記』の「大亀生毛、而兎生角、是甲兵将興の兆」に由来し、「殷の紂の治世に大亀に毛が生え、兎に角が生えた。これは戦乱の起こる兆に違いない」が漢詩の意味になります。世界中の誰もが戦争のない平和を願っています。

○現代俳句協会は長年の念願であった一般社団法人化へ大きな一歩を踏み出しました。今後は従来以上に四十二区の地区協会の自主的な活動範囲が拡がり活性化した活動が図れるようになります。手に手を携えて兎のように飛躍する年にしたいものです。

（長井　寛）

『現代俳句』・1月号・685号

令和4年(2022年)12月25日印刷　令和5年1月1日発行
発行人　後藤　章　編集人　長井　寛
発行所　現代俳句協会　〒101-0021 東京都千代田区外神田6-5-4 偕楽ビル(外神田)7階
電　話　03-3839-8190　FAX　03-3839-8191
振　替　00160-6-52603
頒　価　600円　会員以外の購読料　半年分　3,600円　1年分　7,200円(送料共)
(URL)https://gendaihaiku.gr.jp/

印刷所　日本ハイコム株式会社　〒399-0651 長野県塩尻市北小野4724

俳句雑誌案内

もっと俳句を！

俳句は出会いの文学です。
良き俳句、良き仲間と出会い、
あなたの俳句にフレッシュな感動を!!

現代俳句協会

（掲載ご希望の結社・同人団体は、協会事務局までご一報下さい。）

青岬

主宰　衣川次郎

誌代　半年　六〇〇〇円（送料共）
一年　一二〇〇〇円（送料共）

〒243―0413 海老名市国分寺台四―十二―六
青岬発行所　衣川次郎
電話・FAX　〇四六―二三二―三九三三
振替　〇〇二九〇―一―一〇二三二七

季刊俳句同人誌

天晴 tensei

代表　津久井　紀代
編集長　杉　美春

新しい作家を繋ぐ発表の場
「実」のある小誌をめざす

誌代・年会費　1万円
〒180-0003　東京都武蔵野市吉祥寺南町 3-1-26　佐藤方
津久井紀代
電話・FAX　0422(48)2110

好日

主　宰　髙橋 健文

誌代　1月　1000 円
1年 12000 円

〒270-0007
千葉県松戸市中金杉 2-78
好日俳句会
電話 047-713-6495
振替 00250-1-141278

石原八束提唱の内観造型の理念を追求

秋

主宰　佐怒賀正美

誌代（送共）　一冊　一四〇〇円
一年分一四〇〇〇円（十冊）

〒176-0004 東京都練馬区小竹町一―四四―八
秋発行所
FAX　〇三―六七六〇―九八七三
振替　〇〇一二〇―四―七八二一〇七秋俳句会

玄鳥

主宰　岡部 榮一

雑詠出句　七句
誌代　1部 1000 円（送料共）
半年 6000 円（送料共）

〒657-0862
神戸市灘区浜田町 1-2-17
Ⅲ904　年清彰雄 方
玄鳥俳句会
振替 01100-1-7162

蛮

主宰　鹿又 英一

会員それぞれの個性・多様性・同時代的態度を尊重する。

季刊・誌代　1年 6000 円
雑詠出句六句

〒221-0814　横浜市神奈川区旭ヶ丘 5-18　鹿又方
蛮の会
電話/FAX 045-491-5745
メールアドレス eichan6@gmail.com
振替 00290-1-114640

俳句雑誌案内

自由句会誌

祭演

Dionysos の宴

主催・森須　蘭

互いに切磋琢磨出来る場を
季刊 雑詠七句 同人互選評
誌代 年間 4000円
〒276-0046
八千代市大和田新田 1004-4
宮坂 方　　森須　蘭
TEL 047-409-8152
FAX 047-409-8153
E-mail
morisuranran8@gmail.com

素朴・単純・平明にして深みのある句を。
師系 加藤楸邨・原田喬・九鬼あきゑ

椎

主宰　村松二本

誌代 一年 一二、〇〇〇円（送料共）
〒434-0016
浜松市浜北区根堅
一九九三-五 太田依子方
振替 〇〇八五〇-四-二三一〇八
椎 発行所

季刊俳誌

牧

MAKI

代表　仲寒蟬

年会費 一二、〇〇〇円
〒160-0022
東京都新宿区新宿一-一五-六
オリエント新宿二〇一 木村晋介法律事務所内
「牧」発行所 木村晋介
FAX 〇三-三三五一-二五五七 Mail office@kimura-law.jp

藍

主宰　花谷　清

雑詠出句 六句（月刊）
誌代 一部一〇〇〇円（送料共）
〒603-8805
京都市北区西賀茂蟹ヶ坂町一二二-三
藍 俳句会
電話 〇七五-四九二-六五五三
振替・〇〇九六〇-五-一二三二二〇

響焔

名誉主宰・山崎　聰
主宰・米田規子

誌代 一年 一二、〇〇〇円（送料共）
〒245-0015
横浜市泉区中田西
三-三五-一六 米田方
響焔 俳句会
電話 〇四五-八〇二-七九一七

信濃俳句通信

（月刊）

主宰　佐藤 文子
編集長　奈都 薫子

誌代 一部800円（送料含む）
発行所
〒390-0804
松本市横田1-28-1
信濃俳句通信社
TEL 0263-32-0320
FAX 0263-32-8332
振替 00560-1-48800

庶民の詩

ひまわり

師系　臼田亞浪・角川源義
主宰　西池みどり

誌代 一年間 15,000 円
〒779-3116
徳島市国府町池尻 47
ひまわり発行所
電話 088(642)1406
振替 01670-7-50

縹

代表・花房八重子

誌代 一年一〇、〇〇〇円（隔月刊 送料共）
〒700-0903
岡山市北区幸町一〇-五〇-七〇八
縹 俳句会
電話・FAX 〇八六-二二三八-七一八二
ゆうちょ振替 〇一三二〇-四-〇一〇三三六

陸

主宰・中村　和弘

雑詠出句 五句
誌代 半年 六、〇〇〇円
一年 一二、〇〇〇円
〒174-0056
板橋区志村二-一六-三三-六一六号
陸 俳句会
振替・〇〇一九〇-七-一七八〇一九

波

伝統を継承し俳句の新領域を開拓する

主宰・山田　貴世

誌代　六ヵ月　六、〇〇〇円（送料共）
一年　一二、〇〇〇円（送料共）

〒251-0875
藤沢市本藤沢一-八-七　山田方
波俳句会
電話・FAX　〇四六六―八二―六一七三番
振替・〇〇二六〇―七―九〇六〇
HPは「波俳句会」で検索

水明

主宰・山本鬼之介

誌代　半年　六、〇〇〇円（送料共）
一年　一二、〇〇〇円（送料共）

〒330―0064
さいたま市浦和区岸町四―一〇―二一
水明俳句会
電話　〇四八―八二二―四七四一番
振替・〇〇一七〇―〇―一九二三九三

加里場

句は心

季刊　師系　石原　八束
主宰　井上　論天

年会費　一〇、〇〇〇円
通信句会費　四、〇〇〇円

〒798-0037
宇和島市丸穂町一丁目三―七
加里場発行所
電話・FAX　〇八九五―二八―六〇七六
振替　〇一六〇〇―六―五六一九五

草樹

師系　桂　信子
代表　宇多喜代子

誌代　半年　6000円（送料共）
1年 12000円（送料共）

〒248-0025
鎌倉市七里ガ浜東3-25-11
渡辺和弘方
草樹発行所
振替　00200-9-83323

あすか

主宰　野木　桃花

誌代　1年12000円（送料共）

〒235-0036
横浜市磯子区中原 2-5-10
あすか発行所
電話　045-771-0992
振替　00190-3-79948

暖響

師　系　加藤　楸邨
雑詠欄選者　江中　真弓
編集長　川村　研治

誌代（送料共）　半年　7200円
1年 14400円

発行所
〒344-0038
春日部市大沼 2-71-131
髙橋邦夫方
暖響俳句会
振替　00190-9-451223
電話/FAX　048-747-5606

麦

師系・中島　斌雄
会長・対馬　康子

出句　七句
誌代　半年　六、〇〇〇円（送料共）
一年　一二、〇〇〇円（送料共）

〒343―0026
越谷市北越谷三―十二―六
麦の会
電話・〇四八―九七五―八七二五
振替・〇〇一六〇―六―一六〇六八三

軸

主宰・秋尾　敏

雑詠出句　七句
誌代　一部　一、〇〇〇円（送料共）
一年　一二、〇〇〇円（送料共）

〒278―0005
野田市宮崎九五
軸俳句会
電話　〇四―七一二二―三九二一番

暁

「青玄」後継誌　隔月刊

代表　桑田　和子

初心者歓迎

会費　半年　六、〇〇〇円　一年　一二、〇〇〇円

〒561―0861
豊中市東泉丘一―五―三―三〇三
桑田和子方　暁俳句会
電話・FAX　〇六―六八四九―二五七四
振替口座　〇〇九三〇―七―三一八二三三

俳句雑誌案内

森林

師系　齊藤美規

主宰　森野　稔

誌代　年会費　一五〇〇〇円

〒939-0731
富山県下新川郡朝日町
東草野一八〇三―一一二
電話　〇七六五―八三―〇八九〇
振替　〇〇七五〇―八―九四九八三
森発行所

京鹿子

定型と季題
内蔵するもの豊かな句

主宰　鈴鹿　呂仁

誌代　1年12000円(送料共)

京鹿子発行所

〒606-8313
京都市左京区吉田中大路町
8-1　野風呂記念館内
電話 075-752-1617
振替 01000-2-27974

青山俳句工場05

俳句の今日と明日と明後日を語り合う

編集・発行　宮崎斗士

隔月誌（通信句会、その他）
1号（1回）につき2句出句
会費（購読料含む）
5回 6,000円　10回 12,000円

〒182-0036
調布市飛田給2-29-1-401
宮崎斗士方
電話　070-5555-1523
メール tosmiya@d1.dion.ne.jp

菜の花

主宰・伊藤政美

雑詠出句　八句
誌代　一部一、〇〇〇円
半年六、〇〇〇円

発行所　菜の花会

〒510-0942
四日市市東日野町一九八―一
振替〇〇八七〇―二―二七六六八

天籟通信

個性豊かに原郷樹林
（月　刊）

てんらいつうしん

師系　穴井　太
代表　福本　弘明

誌　代　1部 1,000円
発行所　〒807-0827
北九州市八幡西区楠木2-6-12
天籟俳句会
Tel/Fax 093-602-6058
振　替　01700-0-36440

自鳴鐘

主宰　寺井　谷子

雑詠出句　五句
誌代　1部1000円

〒803-0825
福岡県北九州市小倉北区
白萩町 2-19
自鳴鐘発行所
電話 093-561-1713
振替・福岡 4-16600

こんちえると

月刊　俳句通信紙

私と時代を視つめ
生きている証しを詠む

師系　大牧　広
版元　牛歩書屋主人（関根　道豊）
主旨：俳句の詠みと読みの協奏
紙代：一年　六〇〇〇円
出句：雑詠一句、題詠一句（互選）

〒330-0804
さいたま市大宮区堀の内町一―六〇六
W八一六
牛歩書屋
電話・FAX　〇四八―六四五―七九三〇

岳

月刊　地貌をからだ感覚を通してうたう

編集長　宮坂　静生
小林　貴子

会費　半年　七二〇〇円
一年　一四四〇〇円
（見本誌申込み）

事務所
〒390-0811
松本市中央一―一―二二
岳俳句会
振替　〇〇五九〇―七―六二六
電話　〇二六三―三六―四六四六

主流

代表　田中　陽

口語俳句の研究と創作

誌代　1部1000円（送料共）
会費　1年6000円（送料共）

〒427-0053
島田市御仮屋町 8778
主流社
振替 00800-0-37863

宇宙

『宇宙』には夢があり明日がある。

主宰　島村　正

平成五年十一月創刊　師系　山口誓子
誌代　一、五〇〇円　一年　一二、〇〇〇円
〒422-8032　静岡市駿河区有東一-一〇-一八
電　話＝〇五四-二八二-三九五一
FAX＝〇五四-二八二-三三四二
「宇宙」発行所

海原

KAIGEN

金子兜太「海程」後継誌
代表　安西　篤
誌代（送料共）1年　12,000円
【海原発行所】
〒272-0024 市川市稲荷木2-14-9 武田伸一方
電話＆FAX 047-377-7510
振替 00210-6-104855

圓座

主宰　武藤紀子

誌代　一年　六〇〇〇円（隔月刊）
〒467-0047　名古屋市瑞穂区日向町三-六十六-五
武藤方　円座俳句会
電話　〇五二-八三三-二一六八
振替　〇〇八七〇-一-一四二九六七

青海波

創刊　斎藤 梅子
主宰　本城 佐和

誌代　半年　7800円
1年 15600円

〒770-0932
徳島市仲之町 2-8-2 本城方

青海波俳句会

電話 088-652-6730
振替 01650-5-4908

紫

創刊　関口比良男
主宰　山﨑　十生

誌代／月額 1,000円

発行所
〒332-0015
川口市川口 5-11-33

紫の会

雪華（ゆきはな）

主宰　橋本喜夫

雑　詠　　出句六句
会員年会費 8,400円（送料共）
発行所　〒078-8345
旭川市東光五条 6丁目1-22

雪華俳句会

FAX・電話　0166-34-4025
kakouton@potato6.hokkai.net
振替口座　02780-4-70865

ぬかるみ

選者　松本真津子

雑詠（白雲集）出句　七句
誌代　半年　6000円（送料共）
1年 12000円（送料共）

〒374-0036
群馬県館林市諏訪町
1427　松本方

ぬかるみ俳句会

振替 00380-3-4537

月刊誌

小熊座

主宰　高野ムツオ

師系　金子兜太・佐藤鬼房
人間風土の尊厳を思い詩性の昂揚を目指す。
誌代　一年一二、〇〇〇円　見本誌一、〇〇〇円
〒985-0863
多賀城市東田中二-四〇-二六-五〇四
小熊座発行所
電話・FAX　〇二二-三六四-六八五九
振替　〇二二〇〇-三-一五二七二

四季

師系　松澤　昭
主幹　松澤雅世

同人集・雑詠　各七句
誌代　1部 1300円（送料共）
1年 7800円（送料共）
隔月刊

〒113-0022　東京都文京区
千駄木 5-48-4-201

四季会

振替 00150-8-56721
TEL/FAX 03-3827-1383

俳句雑誌案内

草炎

主宰　久行 保徳

同人作品五句　雑詠出句七句
誌代　1部1000円(送料共)
1年6000円(送料共)
隔月刊

〒745-0825　周南市秋月2-4-18
草炎俳句会
振替 01500-4-3573
電話/FAX 0834-28-2344

八千草

自然・人生を優しく見つめあう輪

主宰 山元志津香
副主宰 横川はっこう

誌代(季刊)一年　四〇〇〇円
〒215-0006 川崎市麻生区金程四-九-八
八千草俳句会
電話　〇四四-九五五-九八八六
振替　〇〇二六〇-四-三九二六

朱夏

隔月刊

師系　金子兜太
主宰　酒井弘司

誌代　1年間　6000円(送料共)
発行所　〒252-0153
相模原市緑区根小屋
2739-149　**朱夏俳句会**
電話・FAX　042-784-4789
振替　00230-2-78527

鷗座(かもめざ)

創刊 2001年8月！ 月刊
平明清新・抒情・生活感覚
師系・古沢太穂

代表　松田ひろむ

●会員募集中！ 初心者歓迎！
見本誌無料進呈
会費 月1000円、同人費月2000円
作品募集　雑詠鴎座
七句　松田ひろむ選
〒174-0046
板橋区蓮根3-12-27-110 松田方
鷗座俳句会
郵便口座 00100-8-485671
TEL&FAX 03-3968-0153

顔

名誉主宰・瀬戸 美代子
主宰・川村 智香子

誌代　半年　六〇〇〇円
常時会員募集中
HPは『顔俳句会』で検索ください。
〒249-0001 逗子市久木 八-一九-四七
顔俳句会
電話・FAX 〇四六-八七二-〇三四二
振替口座・〇〇二六〇-七-五一〇五九

夢

師系 前田吐実男
主宰・朧 潤

オンリーワンの俳句を目指す
年会費一万円　見本誌八〇〇円(切手で可)
雑詠出句三句　初心者歓迎
〒248-0007 鎌倉市大町三-四-二十五
夢発行所
電話　〇四六七-二三-一四一七

遊牧

兜太俳句の真髄を継承する

隔月刊

名誉代表 塩野谷 仁
代表 清水 伶

誌代　一年　六、〇〇〇円(送料共)
〒290-0003 市原市辰巳台東五-三-一六 大西方
遊牧俳句会
電話　〇四三六-七四-五三四四
振替　〇〇一一〇-一-一一八〇七一

山河

代表　山本 敏倖

自分と俳句を自由に育てる会

同人作品五句　雑詠五句(隔月)
会員費年間8000円(送料共)
誌友　年間6000円(購読料)
〒116-0014 荒川区東日暮里
3-34-10 山本方
山河発行所
電話 03-3801-1656

虎杖(いたどり)

代表　松本 勇二

季刊　雑詠7句
誌代 半年6000円 1年12000円
〒791-1106
松山市今在家1-6-32
虎杖発行所
電話/FAX 089-958-6417
E-mail yuji81900727@yahoo.co.jp

俳句雑誌案内

香天

師系・鈴木六林男
代表・岡田　耕治

誌代（季刊）年　三〇〇〇円
〒598-0007　大阪府泉佐野市上町
二-六-三八-二〇一　香天の会
FAX　〇六-七六三五-七八二一
メール　okada575@mail.com
振替　〇〇九七〇-六-二二五四六八

蝶

代表　味元昭次

雑詠７句　初心者歓迎
年間会費　5000円（隔月刊）
発 行 所　〒789-1201
高知県高岡郡佐川町甲1620-8
電　　話　0889-22-4114
振替口座　01680-7-69384
蝶俳句会

新人の育成と個性の開花
（新会員募集）

山彦

主宰　河村 正浩

誌代　半年 2500 円
1 年 5000 円
〒744-0024
下松市花岡大黒町 526-3
山彦俳句会
振替 01360-6-95793

「現代俳句」電子版購読のご案内

電子書籍オンラインストア「Reader Store」において、「現代俳句」電子版を協会員に無料でご提供できることになりました。

【事前の利用者登録】

ご利用のためには、事前に「Reader Store」（https://ebookstore.sony.jp/）で利用者登録が必要です（登録無料）。画面右上の「無料ではじめる」から利用者登録できます。なお、Google（Gmail）、Twitter、LINE、Apple ID を普段お使いの方は、利用者登録が簡単になります。

【無料クーポンの登録】

「現代俳句」電子版を無料で閲覧するには、当該号の協会員限定クーポンの登録が必要です。クーポンが登録されると、自動的に本棚に当該号が入ります。下記のページからクーポンを登録してください。
https://bit.ly/3VNXVaO

QR コードからもアクセスできます。

その他、クーポンコード：Z4FGHDXD9NB9 をご入力いただく方法もございます。詳しくは、協会 HP をご覧下さい。
https://gendaihaiku.gr.jp/learn/gendaihaikudenshiban/

皆様の個性溢れる俳誌

Romanée-Conti

代表　播磨穹鷹

同人会長　永井　　潮
総　　務　中村光影子
運　　営　松原　君代

月刊誌 毎月五句 誌代￥1,000
〒671-2577　TEL 0790-62-0737
兵庫県宍粟市山崎町山崎317
ロマネコンテ俳句ソシエテ
ぱ・る・る 14380-59467381
romanee7@eos.ocn.ne.jp

第二十四回現代俳句協会年度作品賞募集！

この賞は、協会会員の日頃の作句活動の中から生まれた優れた作品を顕彰するため制定されたもので、毎回、多くの方から応募いただいております。今回も皆様のチャレンジをお待ちしております。

◆選考委員　選考委員は左記のとおりです。
浦川聡子、江中真弓、こしのゆみこ、原　雅子、山﨑十生（五十音順）

◆応募資格　現代俳句協会員に限る。
応募は一人一編のみとする。尚、応募原稿は返却しません。

◆対象作品　雑詠三十句。
令和四年一月～十二月間の既発表または未発表の作品とし、他賞およびコンクールでの入選作は応募作品に含まない。

◆応募用紙　**A４判・四百字詰め原稿用紙二枚にタイトルと句番号を付した作品三十句のみを記入する。**
これとは別の原稿用紙一枚に、タイトル、氏名、年齢、住所、電話番号、俳歴を記入する他、句番号ごとの発表誌名と発表月を明記する。未発表句には「未発表」と記入する。
＊作品を記入した原稿用紙には氏名および発表誌名を記入しないようお願いします。

◆投稿先　〒101－0021 東京都千代田区外神田六－五－四階楽ビル外神田七階　現代俳句協会宛
＊封筒に「年度作品賞応募作品在中」と朱記して下さい。

◆整理費　**二〇〇〇円**（定額小為替同封または現金書留にて）

◆締切日　**令和五年三月三十一日（必着）**

◆発表　会員誌『現代俳句』に受賞作品を発表。

◆顕彰　賞状および賞金十万円

◆表彰式　令和五年十一月三日（金）
第六十回現代俳句全国大会席上にて。

◆原則として、全応募作品を対象に本選を行う。
但し、応募数が想定を超える多数となった場合は予選を実施することがある。

◆選考は、作品を記入した二枚を事前に選考委員に送付し、選考委員会の場で審議・決定する。
（住所氏名等を記入した用紙は顕彰部および事務局にて保管する）

現代俳句協会

現代俳句

令和五年（２０２３年）一月一日発行　通巻六八五号

毎月一回一日発行

頒価　六〇〇円